

五里原遺跡・吉田宮脇遺跡

——市道吉田西条線築造工事に伴う発掘調査報告書——

2011年3月

中野市道路河川課
中野市教育委員会

五里原遺跡・吉田宮脇遺跡

——市道吉田西条線築造工事に伴う発掘調査報告書——

2011年3月

中野市道路河川課
中野市教育委員会

例 言

- 1 本書は市道吉田西条線の築造工事に先立ち行われた吉田宮脇遺跡（YSDM）・五里原遺跡（GRHR）の緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、吉田宮脇遺跡第1次が平成21年9月1日～平成21年12月21日、吉田宮脇遺跡第2次・五里原遺跡が平成22年8月1日～平成22年12月13日にわたって実施した。
- 3 本調査は中野市道路河川課が(株)中野広域シルバー人材センターに委託して行った。中野市教育委員会は本調査の指導にあたった。
- 4 遺構の実測は、岡田良幸・橋内賢裕・黒鳥精一・鈴木英一・武田良平・田村多恵子が行い、遺物の実測は、岡田良幸・橋内賢裕・鈴木英一・武田良平・田村多恵子・土屋直美・平尾恭子・山本麻由美が行った。
- 5 遺構の写真撮影は、吉原佳市が行った。
- 6 遺物の復元は、黒鳥精一・関武が行った。
- 7 調査区のグリットは4m×4m単位で、東西にA～C、南北に1～42と表示した。
- 8 本報告書は関孝一・中島庄一の指導を受け、吉原佳市が編集した。なお、文責は目次に記した。
- 9 引用文献・参考文献は、第6章の末に一括掲載した。
- 10 本遺跡の出土遺物、実測図等の記録資料は中野市立博物館で保管している。

凡 例

- 1 挿図中の方向はすべて真北を示す。
- 2 各遺構及び出土遺物の注記は、次のとおりである。

SB	住居址
SK	土坑
S	stone (礫)
A・B・C	A～C調査区
	A～Cグリット
- 3 遺物実測図は、原則として縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器平安土器、石器、石製品、鉄釘は1/3、勾玉・管玉・ガラス小玉、銭貨1/1、鉄製品1/3を原則として掲載している。
- 4 本書に掲載した平安時代土器・陶器のスクリーントーンは、黒色処理及び灰釉施釉部分を表わす。また断面塗りは、須恵器、灰釉陶器を示す。

目 次

例言・凡例

第1編 概要

第1章 経過	1
第1節 調査に至る経過	吉原佳市・1
第2節 調査経過	2
第3節 調査日誌	2
・第1次吉田宮脇遺跡	松本周作・2
・第2次吉田宮脇遺跡・五里原遺跡	吉原佳市・9
・五里原遺跡	10
第2章 遺跡の位置とその周辺	16
第1節 遺跡の位置と自然環境	16
第2節 周辺の遺跡	17
第3節 層序	20

第2編 五里原遺跡の調査

第1章 縄文時代	吉原佳市・22
第1節 遺物	22
土器	22
第2章 弥生時代	24
第1節 遺構	24
1 竪穴住居址	24
2 木棺墓	35
3 土坑墓	37
4 土坑	37
第3章 平安時代	39
第1節 遺構	39
1 竪穴住居址	39
2 その他の建物址	41
第4章 弥生時代	48
第1節 遺物	48
1 土器	48
2 土製品	49
3 鉄釧	49
4 ガラス小玉	49
5 管玉	49
6 勾玉	49

第5章 平安時代	57
第1節 遺物	57
土器	57
第6章 その他の遺物	63
土器・錢貨	63
石器・石製品	63

第3編 吉田宮脇遺跡の調査

第1次調査

第1節 遺構	中島庄一	67
1 遺構の調査		67
2 第Ⅰ検出面の遺構		67
3 第Ⅱ検出面の遺構		67

第2次調査

第1章 弥生時代		69
第1節 遺構	吉原佳市	69
第2章 平安時代		69
第1節 遺構	吉原佳市	69
第2節 遺物	中島庄一	70
1 弥生時代の遺物		70
2 古代の遺物		70
3 中世の遺物		71
結語	関孝一	101

挿図目次

第1図 調査区の設定	15	(表) 周辺の遺跡地名表	18
第2図 遺跡の位置	16	第4図 グリットの配置と遺構の分布	19
第3図 周辺遺跡	17	第5図 各調査区層序模式図	20

五里原遺跡

第6図 縄文時代の土器	23	第16図 弥生時代 木棺墓	36
第7図 弥生時代 第1号住居址	26	第17図 弥生時代 土坑墓	38
第8図 弥生時代 第2号住居址	27	第18図 弥生時代 土坑	39
第9図 弥生時代 第3号住居址	28	第19図 平安時代 第1号住居址	41
第10図 弥生時代 第4号住居址	29	第20図 平安時代 第2号住居址とかまど	42
第11図 弥生時代 第5号住居址	30	第21図 平安時代 第2号住居址と柱穴群	43
第12図 弥生時代 第6号住居址	31	第22図 平安時代 第3号住居址	44
第13図 弥生時代 第7号住居址	32	第23図 平安時代 第4号・第5号住居址	45
第14図 弥生時代 第8号住居址	33	第24図 平安時代 第6号住居址	46
第15図 弥生時代 第9号・第10号住居址	34	第25図 平安時代 掘立柱建物址	47

第26図	弥生時代の土器 1	50	第33図	平安時代の土器 1	58
第27図	弥生時代の土器 2	51	第34図	平安時代の土器 2	59
第28図	弥生時代の土器 3	52	第35図	平安時代の土器 3	60
第29図	弥生時代の土器 4	53	第36図	平安時代の土器 4	61
第30図	弥生時代の土器 5	54	第37図	平安時代の土器 5	62
第31図	弥生時代の土器 6・土製品	55	第38図	その他の遺物	65
第32図	鉄銅・ガラス小玉・管玉・勾玉	56	第39図	石器・石製品	66

吉田宮脇遺跡

第40図	第1グリットの配置と遺構の位置	72	第55図	A区第Ⅱ面 柱穴の分布 3	87
第41図	A区第Ⅰ遺構面 土坑・井戸	73	第56図	A区第Ⅱ面 柱穴の分布 4	88
第42図	B区第Ⅰ面 土坑	74	第57図	B区第Ⅱ面 柱穴の分布 1	89
第43図	A区第Ⅰ面 第1号・第3号溝	75	第58図	B区第Ⅱ面 柱穴の分布 2	90
第44図	A区第Ⅰ面 第2号溝	76	第59図	B区第Ⅱ面 柱穴の分布 3	91
第45図	A区第Ⅰ面 柱穴	77	第60図	第Ⅲ面 グリットの配置と遺構の位置	92
第46図	第Ⅱ面 グリットの配置と遺構の位置	78	第61図	C区第Ⅲ面 第1・第2号住居址	93
第47図	B区第Ⅱ面 第1号住居址	79	第62図	B・C区第Ⅲ面 土坑・柱穴群	94
第48図	A区第Ⅱ面 土坑 1	80	第63図	出土遺物 1	95
第49図	A区第Ⅱ面 土坑 2	81	第64図	出土遺物 2	96
第50図	B区第Ⅱ面 土坑	82	第65図	出土遺物 3	97
第51図	A区第Ⅱ面 溝	83	第66図	出土遺物 4	98
第52図	B区第Ⅱ面 溝	84	第67図	出土遺物 5	99
第49図	A区第Ⅱ面 柱穴の分布 1	85	第68図	出土遺物 6	100
第49図	A区第Ⅱ面 柱穴の分布 2	86			

写真図版目次

図版 1 遺跡遠景 調査風景 (五里原遺跡B)

五里原遺跡

図版 2	A区全景 第1号住居址 第1号住居址柱穴 第1号住居址土器出土状態
図版 3	B区全景 第2号住居址 第3号住居址 第8号住居址
図版 4	C区全景 (南より) C区全景 (北より)
図版 5	第4号住居址 第4号住居址完全掘状態 第9号住居址 第10号住居址
図版 6	第5号住居址 第5号住居址完全掘状態 第5号住居址土器出土状態 第6号住居址 第7号住居址 第7号住居址礎石入状態
図版 7	SK1 SK2 SK3 SK3遺物出土状態 SK4 SK5 SK5遺物出土状態
図版 8	SK6 SK7・SK8 SK9 SK10・SK11 SK12 SK12土器出土状態

図版 9 第1号住居址 第1号住居址カマド土器出土状態 第2号住居址
第2号住居址カマドと煙道 第2号住居址と柱穴群

図版10 第3号住居址 第3号住居址カマド A区礫層 A区礫層断面
第4号住居址 第5号住居址 第6号住居址 掘立柱建物址

図版11 調査風景1 (吉田宮脇遺跡C) 調査風景2 (五里原遺跡A)
調査参加者・(第2次吉田宮脇遺跡・五里原遺跡)

吉田宮脇遺跡

図版12 C区全景 SK2 SK1 1号住居址・2号住居址 掘立柱建物址

第1編 概要

第1章 経過

第1節 調査に至る経過

中野市では、平成22年度に社会資本整備総合交付金事業として市道吉田西条線築造工事を計画した。工事計画区内には吉田宮脇遺跡と五里原遺跡が所在し、工事が遺跡に影響を及ぼすことから、平成21年度より2ヶ年にわたり発掘調査を実施した。平成22年度は遺跡の調査面積等に鑑み、吉田宮脇遺跡・五里原遺跡調査指導委員会を組織し、詳細な保護協議のもとで調査を実施した。

第1次吉田宮脇遺跡発掘調査団

団 長	関 孝一	中野市文化財保護審議会長
調 査 員	村田 道博	(株)大成エンジニアリング
調査補助員	松本 周作	(株)大成エンジニアリング
事 務 局	池田 徹	山岸 佳祐

(発掘調査参加者)

石井博・榎本勝雄・小根澤守・黒岩哲彦・黒鳥精一・鈴木金三・関武・武田良平・土屋富司・徳竹知従・徳永徳一・平尾恭子・古幡和治・松宮功・三浦吉郎・水野利彦・武藤良助・村上治

(整理作業参加者)

土屋直美・平尾恭子・山本麻由美

第2次吉田宮脇遺跡・五里原遺跡発掘調査指導委員会

委 員 長	関 孝一	調査団長
理 事	中島 庄一	中野市立博物館長
”	町田 茂	中野市道路河川課長
”	高野 澄江	(社)中野広域シルバー人材センター事務局長
”	町田 郁夫	中野市教育委員会生涯学習課長
委 員	吉原 佳市	調査主任
”	小嶋 昭一	中野市道路河川課係長
”	池田 徹	(社)中野広域シルバー人材センター主任
”	佐々木 正	中野市教育委員会生涯学習課課長補佐

第2次吉田宮脇遺跡・五里原遺跡発掘調査団

団 長	関 孝一	中野市文化財保護審議会長
調 査 主 任	吉原 佳市	木島平村文化財専門委員
調査補助員	岡田 良幸	
”	橋内 賢裕	
事 務 局	池田 徹	山岸 佳祐

(発掘調査参加者)

石井博・榎本勝雄・大塚和津美・黒岩哲彦・黒鳥精一・鈴木英一・鈴木金三・関武・
武田良平・田村多恵子・土屋富司・徳竹知従・徳永徳一・古幡和治・松宮功・三浦吉郎・
水野利彦・武藤良助・村上治

(整理作業参加者)

黒鳥精一・鈴木英一・関武・武田良平・田村多恵子・土屋直美・平尾恭子・山本麻由美

第2節 調査経過

調査は、最初に工事が着手される予定の北側から開始した。工事予定地は、吉田宮脇遺跡の東部端に沿い南下しているため、平成21年度は北側部分から南へA区、B区を設定し調査を行った。22年度は、B区の南側にC区を設定し調査した。調査を進める中で、C区の南側部分が地中深くまで礫層が続いているため、C区の南側に一部未調査部分を残し、五里原遺跡の調査に移った。五里原遺跡の調査が進むにつれ遺跡の範囲が南側へ拡大していることが判明し、当初の調査区をA区、さらに道路を挟み南へB区、C区と設定し拡張した。吉田宮脇遺跡C区の南側から五里原遺跡A区の北側部分の間は、地中深くまで礫層が続いていること、かつて近世の吉田堰所在地であったことなどから、調査の必要性が乏しいと判断した。

過去の調査では、吉田宮脇遺跡に比べ、五里原遺跡の遺構・遺物の発見がきわめて少なく、今回の調査も同様な結果にならうと予想されたが、従来の両遺跡の分布状況を覆す結果となった。五里原遺跡の調査において多くの遺構・遺物が発見された。

第3節 調査日誌

第1次吉田宮脇遺跡

平成21年9月1日(火)

シルバー人材センターと調査打合せ後、発掘・器材を確認した。

9月2日(水)

中野市博物館において調査打合せを行う。現場測量杭を確認し、現場器材を購入した。

9月3日(木)

調査打合せ後、道路工事杭の現地確認を行う。三角点確認。

9月4日(金)

調査打合せ後、調査区草刈り、報告書作成用資料収集。

9月7日(月)

調査区草刈り、安全防護柵の設置、器材運搬を行う。

9月8日(火)～9月9日(水)

前日に続き安全防護柵設置、調査区草刈り。

9月10日(木)

調査打合せ(畑地灌漑施設現地確認等)、報告書作成用資料収集。

9月11日(金)

土層観察用試掘坑掘削、重機によるりんごの木抜根、作業実施、調査前状況写真撮影。

9月14日(月)

中野市博物館にて調査方法及び工程打ち合わせ。道路を挟んで調査区を南北(北側調査区をA区、南側調査区をB区)に分けることとした。調査区内にあった土山の移動と整地、土層観察用試掘坑掘削。

9月15日(火)

仮設事務所用地の整地作業、B区の表土の掘削除去と搬出作業、安全防護柵設置。

9月16日(水)

B区の表土の掘削除去と搬出作業。器材購入、運搬、仮設事務所搬入。

9月17日(木)

現地にて、調査の方向性について打ち合わせ。B区の表土の掘削除去と搬出作業。

9月18日(金)

B区の表土耕作土の掘削除去と搬出作業、器材運搬、器材収納用テント設置。A区表土掘削、東、南壁面土層確認、清掃、養生(マルチシート使用)、南側から遺構検出。

9月24日(木)

A区表土機械掘削完了、壁面清掃、分層、壁面養生、壁面土層断面写真撮影、遺構検出)、B区表土機械掘削。

9月25日(金)

A区表土掘削および遺構検出、礫の空白地があり、これらを暫定的に遺構として調査を実施。礫層から珠洲焼の破片が少量出土している、B区表土掘削。

9月28日(月)

A区表土掘削と遺構検出および遺構掘削、B区表土掘削、遺構確認。

9月29日(火)

作業開始時刻に雨天になり、現場作業は中止。調査に関する作業員への説明会を実施、センター杭4本打設。

9月30日(水)

A区トレンチ掘削、一辺4mのグリッド設定、遺構検出および遺構掘削、B区表土掘削、遺構確認、雨天により午後に現場作業中止。

10月1日(木)

A区センター杭沿いに設置したトレンチ掘削、溝状遺構トレンチ掘削、表土人力掘削、グリッド設定、B区表土掘削、遺構確認。

10月2日(金)

A区トレンチ掘削、グリッド設定、表土人力掘削、B区遺構確認。雨天により午前11時に現場作業中止。

10月5日(月)

A区 SD1 中世の小溝?埋土は砂礫 掘削・記録、溝状遺構掘削、土坑(井戸?)掘削、B区表土掘削、遺構確認、攪乱土除去作業開始、黄褐色土は現代埋土であることが判明。遺構掘削(SK1)。作業終了直前で、台風の影響による、降水確率での雨天が予想されたため、明日の作業は中止とした。

10月6日(火)

B区 グリッド設定。

10月7日(水)

A区 溝状遺構掘削、SD1 完掘状況記録。B区 遺構掘削(SK1)、攪乱土除去作業、台風18号接近のためテント撤収等、台風対策作業。午後4時から雨天のため現場作業中止。

10月8日(木)

台風18号接近により現場作業中止。台風被害状況確認のため巡回を実施。

10月9日(金)

A区 SD2(中世溝?)掘削、清掃、A-A'土層断面記録、SD3(中世溝?)掘削、清掃、A-A'土層断面記録、井戸と推定される土坑をSE1とする。埋土掘削、底面近くから出土した炭化種子の記録、西壁際に設定したトレンチ掘削、B区(攪乱土除去、遺構確認)。遺構掘削(SK1、SK2)。

10月13日(火)

A区 SD2掘削、清掃、土層断面記録、SD3掘削、清掃、土層断面記録、遺構検出、SE1掘削、トレンチ掘削、B区 攪乱土除去、遺構掘削(SK1~3)、B区用の仮BMを設営。

10月14日(水)

A区 SE1清掃、土層断面写真撮影、第1面完了状況撮影のための清掃、SD2、3完掘状況個別写真撮影、第1面完了状況写真撮影(南半)、B区(遺構掘削(SK2~4)、攪乱土除去)。

10月15日(木)

A区 SE1土層断面再撮影、図面作成、ベルト掘削、SD2完掘状況図面作成、第1面完了状況撮影のための清掃(北半)、B区 遺構掘削(SK2・SK4)、第1面完了状況写真撮影、調査区全域に収まらないため、分割して撮影する。北側(19グリッド)から順次南へと移動。

10月16日(金)

A区 第1面完了状況撮影のための清掃、写真撮影、SE1完掘状況写真撮影、第1面完了状況図面作成、B区 遺構掘削(SK2~4)、第1面完了状況写真撮影。

10月19日(月)

A区 第1面完了状況図面作成、SE1完掘状況、エレベーション図(A-A'、B-B')作成、Ⅲ層 包含層掘削、B区 第1面完了状況写真撮影完了、第1面全測図作成。

10月20日(火)

A区 Ⅲ層(包含層)掘削、第1面完了状況図面作成、B区 第1面全測図作成。

10月21日(水)

A区 Ⅲ層(包含層)掘削、第2面遺構検出作業、Pit半載作業(南側から)、B区 第1面全測図作成。

10月22日(木)

A区 第2面遺構検出作業、礫層掘削(夜間瀬川氾濫流路?)、Pit1,2清掃、土層断面記録、土層堆積状況により第1面(中世文化面)に伴うと考えられる。トレンチ掘削、B区第1面全測図作成。

10月23日(金)

A区 Ⅲ層掘削、第2面遺構検出作業、Pit1,2掘削、清掃、完掘状況記録、畑地灌漑施設

除去、トレンチ掘削、B区 第1面全測図作成(完了)、第2面遺物包含層 基本層序Ⅲ層掘削除去作業を開始、掘削深度が約15cm前後と浅いので人力により作業実施。

10月26日(月)

雨天のため、整理作業。調査工程の再検討。

10月27日(火)

A区 調査区北側へ拡張のため10グリッド表土人力掘削、畑地灌漑施設除去、雨天により午前10時から待機するが、回復が見込めないと判断。午後の現場作業を中止。

10月28日(水)

A区 調査区を北側へ拡張(10グリッド鉄まで)、畑地灌漑施設除去、C13,14グリッドのベルト土層記録作業、遺構検出、半載、B区 第2面遺物包含層(基本層序Ⅲ層)掘削除去作業。

10月29日(木)

A区 Ⅲ層掘削、遺構半載、Pit土層断面記録作業、P10まで写真撮影、P7まで図面作成、B区 第2面遺物包含層(基本層序Ⅲ層)掘削除去作業。

10月30日(金)

A区 遺構土層断面記録作業、P23まで写真撮影、P20まで図面作成、Pit掘削、第2遺構確認図再検出作業、13,14グリッドの粘質土層、レキ層を掘削、東側トレンチ掘削、B区第2面遺物包含層(基本層序Ⅲ層)掘削除去作業。

11月3日(火)

A区 pit土層記録作業、遺構検出作業、遺構半載作業、B区 第2面遺物包含層(基本層序Ⅲ層)掘削除去作業。

11月4日(水)

A区 遺構土層断面記録作業、遺構完掘作業、遺構検出作業、遺構半載作業、B区 第2面遺物包含層(基本層序Ⅲ層)掘削除去作業。

11月5日(木)

A区 遺構土層断面記録作業、K4,SD4まで完掘写真終了、遺構検出作業、遺構半載、完掘作業、B区 第2面遺物包含層(基本層序Ⅲ層)掘削除去作業。

11月6日(金)

A区 遺構土層断面記録作業、遺構完掘状況写真撮影、遺構半載、完掘作業、南半Pit完掘状況写真撮影、B区(第2面遺物包含層(基本層序Ⅲ層)掘削除去作業。

11月9日(月)

A区 Pit掘削作業、Pit完掘状況個別写真撮影、特徴的なPitをピックアップし、撮影した。写真撮影のための全体清掃、半Pit群写真撮影、2面完了状況写真撮影、B区 第2遺物包含層(褐色土層)掘削除去作業、北側から遺構掘削を開始。

11月10日(火)

A区 グリッド鉄再設定、含層(Ⅲ層)掘削により生じた鉄のズレを修正した。Pitエレベーション図作成、層断面図を残せなかったPitに関してはエレベーション図を作成。第2面完了状況全体図作成、B区 遺構掘削(SD1・2・Pit1)、1Bグリッドにある円形プランの遺構は、掘削の結果、風倒木痕であることが判明。遺構として扱わず、埋土に伴う遺

物の回収のみを予定している。南エリアの包含層掘削は黒色土の上面を第2遺構確認面となることを確認。他所に比べて大きめの古代土器破片の出土が目立つエリアがあり、遺構確認は急務と思われる。

11月11日(水)

雨天のため現場作業は中止。器材運搬。

11月12日(木)

A区2面完了全体図作成作業、B区北エリア遺構検出と掘削(半裁)、遺構完掘状況写真清掃と撮影(SD1・2、Pit1)、南エリアの包含層(褐色土)掘削除去作業。

11月13日(金)

A区第2面完了全体図作成終了、調査区東壁土層断面清掃後、分層し、作図の準備、B区北エリア遺構検出と掘削(半裁)、南エリアの包含層(褐色土)掘削除去作業、土層断面写真撮影及びセクション図作成。

11月16日(月)

A区調査区東壁土層断面図作成(10~17グリッド)、B区南エリアの包含層(褐色土)掘削除去作業 午前をもって完了、土層断面写真撮影及びセクション図作成(SK5ほか)、遺構検出、竪穴住居跡1軒とPit及び土坑を30基程度検出。遺構掘削、検出した遺構の掘削(半裁と完掘)。

11月17日(火)

雨天のため現場作業中止。A区作業工程検討、バックホー1台搬入(A区北側から)。

11月18日(水)

A区午後から機械掘削、調査区東側を機械で深掘りし、第2面下層からの遺構、遺物の無いことを確認した。その後、A区北側の表土掘削を一部行った後 南側の埋め戻しをした。埋め戻しは3割程度終了しており、明日引き続き行う予定である。B区1号竪穴住居跡(SB1)の調査。構覆土の掘削、セクション図作成(カマドを除く)。下部遺構は確認できなかったものの、焼土の集中する地点もあり、氾濫などの後天的要因によって本来存在していた遺構が破壊されている可能性は十分に考えられる。土層注記。

11月19日(木)

A区調査区東壁土層断面記録作業(清掃後、写真撮影、図面作成)、写真はグリッドごとに撮影した。図面は半分程度終了。南側埋め戻し、東壁部分を残し、ほぼ完了した。北側表土掘削、第1面調査のための機械掘削を行い、3割程度完了した。B区40~43グリッド調査完了。清掃後写真撮影、遺構確認と遺構掘削(SB1ほか)、遺構セクション図作成。

11月20日(金)

A区調査区東壁土層断面記録作業終了、南側埋め戻し、人力掘削の廃土を置くため東壁沿いは埋め戻していない。北側表土掘削、第1面調査のための機械掘削を行い、7割程度終了した。壁面清掃、遺構検出作業、B区SB1遺物出土状況撮影後遺物取り上げ作業、カマドの調査を残す。床面の一部に貼床が認められる。柱穴や周溝は未確認である。遺構掘削(半裁と完掘)および写真撮影、遺構の半裁はすべて完了。

11月24日(火)

A区表土機械掘削、中央部付近でⅢ層の堆積が薄く、第2面が一部露出している。また、

中央部分のⅢ層はやや黄色味がかった明るい色調を呈す。グリッド設定作業、壁面清掃、攪乱部掘削、B区SB1カマドの調査、土層図の作成と掘削。遺構完掘および写真撮影、遺構の土層図作成、遺構平面全測図の作成。

11月25日(水)

A区土機械掘削終了、南側の状況とは異なり、礫層は北西部分でわずかな広がりが見られる程度である。攪乱部掘削遺構検出、半裁、第1面の遺構は今のところ数個のPitが確認されている。B区SB1カマドの調査、平面図(遺物分布図を兼ねる)作成と遺物取り上げ後完掘。写真撮影、遺構完掘および写真撮影、土層図作成と遺構掘削を完了した。

清掃が必要なため完掘写真を残す。遺構平面全測図の作成。

11月26日(木)

A区第1遺構確認面遺構検出。C・Dグリッドの6基の遺構プランを確認した。6~9グリッドの第1面完了状況写真撮影のための清掃を行った。6~9グリッド第1面完了状況写真撮影、6~9グリッド第1面完了状況図面作成、B区SB1平面図完了、掃後写真撮影。完了写真撮影、遺構平面全測図の作成。

11月27日(金)

A区6~9グリッド第1面完了状況図面作成(レベリング)、遺構の掘削と記録作業、Pit82~86、SK5の土層断面の写真撮影と図面作成をした。Pitは完掘し、完掘状況の撮影も終了している。8,9グリッドの包含層(Ⅲ層)掘削、B区遺構平面全測図の作成。図面3枚分(6グリッド分)のレベリングを残すのみとなった。完了写真撮影終了、機械掘削開始。第3遺構確認面の覆土と予想される黒色土を慎重に除去した。黒色土は、B区南側(39グリッド以南)で検出した黒色土と同一であることが判明。北へ大きく落ち込む地形であることを確認した。

11月30日(月)

A区SK5掘削、完掘状況写真撮影、1~5グリッド清掃作業、1~5グリッド第1面完了状況写真撮影、図面作成。6,7グリッド包含層(Ⅲ層)掘削、B区遺構平面全測図の作成とレベリング完了、第2遺構面(古代面)の調査は完了。第3遺構確認面の覆土除去作業、機械掘削による。黒色土堆積の北限を確認できた。地表面からの深さは2mを超えている。

12月1日(火)

A区1~4A~Eグリッド第1面平面図作成終了、第1面の調査を完了。包含層(Ⅲ層)掘削、4グリッド分、約60㎡の掘削を残す。明日には終了し、遺構確認及び遺構掘削に着手する予定、B区機械掘削第3面(弥生時代)包含層除去作業。地表から2.5m前後の深度で第3面を検出。包含層は黒色土で、僅かに弥生土器が含まれる。現時点では、遺構未確認。東壁面清掃と作図、氾濫による砂礫層が第3面を大きく壊していることが判明した。

12月2日(水)

A区包含層(Ⅲ層)掘削、昨日の残りを掘削し、本日Ⅲ層の掘削を終了した。第2面遺構検出作業、A,Bグリッドの遺構検出をほぼ終了し、一部は掘削に入っている。現在のところ遺構は30基程度確認している、B区機械掘削第3面(弥生時代)包含層除去作業、東壁面清掃と作図。

12月3日(木)

A区遺構検出、遺構掘削。A,Bグリッドで検出した第2面の遺構のうち四分の三程度に着手している。明日はC,Dグリッドの遺構を検出し、掘削に入る予定である、B区機械掘削、東壁面の清掃と作図。雨天のため、午後から現場作業を中止した。

12月4日(金)

A区遺構検出、C,D(1~3)グリッドの遺構検出を行った。遺構掘削、C,Dグリッドの遺構を主に掘削した。調査区中央部付近に井戸と推定される大型の遺構を検出し、掘削した。本日の作業で、現在確認している大型の遺構はすべて掘削に入っている、B区東壁面土層概略図作成および確認修正。雨天のため午後から現場作業を行った。

12月7日(月)

A区遺構掘削、A,Bグリッドの遺構を主に掘削し、ほぼ半截を終えた。遺構検出、C,D(1~6)グリッドの遺構検出を行った。遺構土層断面記録、Pit87~90,SK6,7土層断面の写真撮影及び図面作成を行った、B区包含層除去、本日にて完了。東壁の清掃、遺構掘削、弥生土器破片が出土している。グリッド鉋打設。

12月8日(火)

A区遺構検出、C,Dグリッドの遺構検出を行った。本日で遺構の検出はほぼ終了した。遺構掘削、遺構の半截作業をした。全体の8割程度の半截を終了した。遺構土層断面記録、Pit96まで、SK10までの図面を作成した、B区遺構掘削、断面図作成。調査区清掃と写真撮影および全測図作成、39グリッドから44グリッドまで完了。一部地域に弥生時代の包含層が厚く残っており、除去作業を開始。谷地形の落ち込みと考えられる。

12月9日(水)

A区遺構掘削、確認しているすべての遺構の半截を終えた。記録作業の終了した遺構は北側から完掘を始めている。遺構土層断面記録、Pit105,SK10,SD10までの写真撮影をした。Pit100,SK13,SD9までの図面作図をした、B区調査区清掃と写真撮影および全測図作成、37・38グリッドが調査完了。写真撮影および図面作成は22~26グリッドまで。遺構掘削と平面図作成、35・36グリッドで検出した遺構のうち、ピット6基については掘立柱建物の可能性がある。なお、ピット内より弥生土器の破片が少量出土している。

12月10日(木)

A区遺構土層断面記録作業、1~5グリッドで確認した遺構の土層断面の写真撮影、図面作成を終了した。遺構掘削作業、1~5グリッドの遺構をほぼ完掘した、B区調査区清掃と写真撮影および全測図作成、22~30グリッド、35~38グリッドまで完了。

12月14日(月)

A区1~5グリッド写真清掃、第2面完了状況写真撮影(1~5グリッド)、遺構土層断面記録作業、Pit140まで写真と図面を終了した。遺構掘削、記録作業の終了した遺構の完掘と新たに見つかった遺構の半截をした。

12月15日(火)

A区遺構土層断面図記録、Pit157,SD13,SK15までの土層断面の写真撮影を行った。第2面完了状況平面図作図、1~4グリッドの平面図の作図を行った。

12月16日(水)

A区遺構土層断面記録作業、確認しているすべての遺構土層断面の写真撮影と図面作図を終了した。遺構掘削、記録作業の終了した遺構の完掘作業をした。第2面完了状況平面図作図、4グリッドまで完了した。5~9グリッドは作図中である、B区埋め戻し。

12月17日(木)

A区遺構掘削、本日で遺構掘削を完了した。写真撮影のための清掃作業、6~9グリッドの清掃作業を行った。第2面完了状況写真撮影、6~9グリッド第2面完了状況の写真撮影を行った。第2面完了状況平面図作図、5~9グリッドの作図を行った。9グリッドの図面に關してはレベリングまで完了している、B区埋め戻し。

12月18日(金)

A区第2面完了状況平面図作図、5~8グリッドの平面図の作図を行い、作図をすべて完了した。撤収作業、B区埋め戻し。

12月21日(月)

現場安全確認、器材返却。

第2次吉田宮脇遺跡

調査を開始した8月は全国的な猛暑でうだるような暑さであり、12月は平地でも初冠雪がある厳しい寒さのため、60代から80代中心の参加者の体調管理には十分気をつけなければならなかった。幸い体調を崩される方もなく調査を無事に終了することができた。

平成22年8月2日(火)

現地にて結団式を行い、器材搬送後に吉田宮脇遺跡の調査を開始した。B1からB5グリッドを掘り下げ層序を確認したが、礫混じりの砂層が続いていた。A16グリッドより北へは黒色土の堆積が見られた。

8月3日(水)

A6グリッドより北西方面へ調査を広げた。土師器片、須恵器片出土。拳大から人頭大の礫が環状に見られたが遺構であるかは不明。数個のピットを検出したため平板測量を行った。

8月4日(木)

A16~F17グリッドを調査。黄色土層に茶褐色土の落ち込みを多く確認したが、層序的に考えても遺構であるか判断しがたい。8個のピット状の落ち込みは形態からも掘立柱建物址の一部か。黒色土層の下部を掘り下げたが、水分を含んだ粘土質であった。A33グリッド、A41グリッドをバックホーで掘り下げ、その南側に方形状の落ち込みを検出した。

8月5日(金)

前日検出した方形の落ち込みを調査したが、黄色土層の下部が黒色土のため、通常の層序とは逆であり判然としない。遺物の出土もまばらで、カマド、焼土等も確認できない。掘立柱建物址については遺物の出土も伴わないため、どの時代のものか不明。

8月9日(月)

B14グリッドに土塊状の落ち込み内に焼土を検出したが、遺物の出土はごくわずかである。F14グリッドにも方形の土坑状の落ち込みと焼土を検出したが、遺物の出土が少ないため遺構になるかは不明。

8月17日(火)

調査区の南側部分と北側部分は礫が入り混じる砂層で黒色土層もないため、調査区北側の未調査部分も同様な状態と考えバックホーにより調査した。やはり同様の状態であったため、北側の未調査部分は調査の必要がないと判断した。調査区の写真記録、平板測量、レベル測量等を行い、本日で吉田宮脇遺跡の調査を終了した。

五里原遺跡

8月18日(水)

本日より五里原遺跡の調査に入った。一部層序を確認するため掘り下げ表土—黒色土層—黄色土層の堆積を確認。攪乱された様子はなかった。10数点の土器片の出土があった。

8月19日(木)

A5グリット集石に土師器片、須恵器片が出土。土師器はまとめて出土。いずれも表土より50cm前後の茶褐色土層より出土。

8月20日(金)

A5グリット集石は形態からかまどに伴う煙道と思われる。北側にかまどらしき方形の集石が見られ、一部に焼土も確認した。さらにかまどを東北端にして方形の落ち込みを確認。茶褐色土層を掘り込んでいた。

8月23日(月)

A10グリットに河原石の集石を確認。焼土、炭化物も見られることからかまどか。数個体と思われる土師器片がまとめて出土した。

8月24日(火)

前日検出した落ち込みは方形で、住居址と考えられる。住居址内からは土師器坏、須恵器片が出土。また、地山の礫からは弥生土器も出土した。いずれも礫間で黒色土層からの出土であった。

8月25日(水)

A10グリットの集石は住居址と切りあったようにして西へ延びていた。このためバックホーによりさらに厚さ15cmほど南側へ掘り下げた。

8月26日(木)

前日バックホーにより掘り下げた面よりさらに10cm~15cm掘り下げた。新たに集石が見られ、土師器片、須恵器片が出土した。礫間の出土であり、黒色土上部の茶褐色土層からの出土であった。

8月27日(金)

集石は数基検出された。いずれも東西に延びており、弥生土器を伴うものと土師器、須恵器を伴うものがある。遺構であるかは不明。

8月30日(月)

集石は直線的なものと円弧状のものがあり、集石というよりは列石なのかもしれない。土器片はまばらな出土であった。

8月31日(火)

A2～A5ラインを調査。弥生土器片が出土したが、出土状態はまばらである。C2グリットに新たに住居址を検出。住居址内からは焼土、炭化物を検出。

9月1日(水)

A5グリットの住居址を1号住居址、A10グリットの住居址を2号住居址、C2グリットの住居址を3号住居址とした。1号住居址内から一部を欠損する小型甕出土。2号住居址内からは欠損する土師器塊2点出土。

9月2日(木)

台風7号の影響によるフェーン現象のため特別な暑さであった。3号住居址も黄色土層を掘り下げて構築されており、1号住居址、2号住居址に比べ掘り込みがかなり深い状況であった。住居址内からは土師器片、須恵器片が多数出土。

9月3日(金)

最も北側の集石(1号集石)の浮いた状態のものを取り除き掘り下げた。弥生土器片多数出土するが、出土状態はまばらである。

9月6日(月)

1号集石及び周辺を調査。弥生土器片が多数出土するが、礫間の出土がほとんどである。2号住居址を精査。かまどは人頭大の河原石を立てて組み合わされており、煙道は拳大の河原石を立てて並べられ、上に川原石が蓋として被されていた。

9月7日(火)

3号住居址にかまどを検出。人頭大の河原石と拳大の河原石の組み合わせにより構築されていた。住居址の東側に検出された集石は精査したが、出土する土器もまばらな状態で出土し、下部に落ち込みもなかった。

9月9日(木)

A7グリットにまとまって弥生土器片が出土。他グリットも土器片が出土するがまばらであった。

9月10日(金)

3号住居址を南西方面に掘り進んだが、道路計画区域外へ延びているため範囲は不明。住居址内より土師器片、須恵器片が出土。

9月14日(火)

3号住居址内にいくつかの円形ピットを検出。多くは内部に焼土、炭化物を含んでいた。また、土師器片の出土もあった。土器片は黒色土層からの出土で、下部の茶褐色土層からの出土はなかった。

9月15日(水)

1号集石から出土の弥生土器片は、ほとんどが黒色土層上位からの出土であった。

9月17日(金)

3号住居址の写真記録。B5、B6グリットに弥生土器片が出土するが、遺構に伴うものか不明。

9月21日(火)

1号集石を掘り下げた。小礫が黒色土層に投げ込まれたように密集した状態で入っていた。

3号住居址の平板、レベル測量。

9月24日(金)

1号集石は調査区西側に続き、礎床墓の形態を示しているが土器片の出土はなかった。

9月27日(月)

調査区全面を地山面(黄色土層)まで掘り下げた。黒色土層からは弥生土器片が出土したが、下部の茶褐色土層からの出土はなかった。

9月29日(火)～30日(水)

1号集石は一部楕円形または方形に密集するところも見られたが、大部分は礎の配置もまばらであった。大きさも小指先ぐらいから人頭大まで様々で、下部には砂利の混入も見られた。自然のものとして考えたほうがよいのか。

10月1日(金)

B1グリットに円形の落ち込みを検出。黄色土層をやや深く掘り込んでおり、内部より弥生土器片が出土。南側道路に続いているため全体形を把握できるかわからない。

10月5日(火)

B1グリットの落ち込みはかなり深くなり、内部から多量の弥生土器片が出土。中央部に人頭大の河原石が集石していた。

10月6日(水)

B1グリットの落ち込み内より焼土、炭化物を検出。これにより落ち込みは住居址と考えられるが、内部の礎は何だろう。

10月8日(金)、12日(火)

B1グリットの住居址の範囲確認を行った。内部の礎を除去したところ、下部より弥生土器片が大量に出土。また焼土、炭化物を数箇所を確認した。やはり住居址の範囲は南側道路下に続いていた。

10月13日(水)

B1グリットの住居址は楕円形の形態で、内部に数個の柱穴ピットがあり、ピットの一部は、内部の壁面が礎により整然と囲まれていた。住居址の平板測量、レベル測量を行った。本日で五里原遺跡A区の調査を終了した。

11月4日(木)

本日から五里原遺跡B区の調査に着手した。調査区全面的に黒色土層より弥生土器片が出土するが、出土状況はまばらである。黒色土層に黄色土のピット状の落ち込みが数個見られるが、遺構であるか釈然としない。

11月5日(金)

黒色土層を全面的に掘り下げたが遺物の出土もまばらのため、Aラインより地山面(黄褐色土層)まで掘り下げることとした。A6～B6グリットに柱穴状ピットが検出され、A5～A6グリットにほぼ完形品の弥生壺、高坏の一部が出土した。

11月8日(月)

A2～B2グリットに楕円形の落ち込みを検出。形態から約半分は北側道路下と考えられた。C7～C8グリットにも方形の落ち込みを検出したが、この落ち込みは黒色土層を掘り込んでいた。一部に焼土も見られたことから住居址と考えられた。

11月9日(火)

前日検出したC7～C8グリットの住居址内にかまどを検出。かまど内及び周辺に土師器片多数出土。またガラス小玉2点出土した。A6グリットに新たにほぼ完形品の弥生甕が、周辺に高坏の一部が出土した。

11月10日(水)

A2～B2グリットに楕円形の落ち込みを調査。遺構内より弥生土器片多数出土。やはり住居址か。C7グリットに打製石斧1点出土。

11月11日(木)

A2～B2グリットの住居址内に柱穴4個と焼土を検出。C2～C3グリットに落ち込みを検出。楕円形を呈し、長軸内部の両側に小口板の掘り込みがあることから木棺墓と思われる。

11月12日(金)

B3グリットに楕円形の落ち込みを検出。住居址と思われるが地山面は砂利混じりの黄色土層のため、床面かどうかははっきりしない。周囲に大小の柱穴状ピットを検出したが関係するものか不明。

11月15日(月)

B3グリット住居址の南側一部を切り合うように掘り込まれている土坑を検出。C2～C3グリットの遺構と同様に楕円形を呈し、長軸内部の両側に小口板の掘り込みがあることから木棺墓と思われる。

11月16日(火)

C8グリットの落ち込みよりガラス小玉20点ほど出土。C7～C8グリットの住居址の下層に検出された2基の木棺墓に伴うものと考えられる。

11月17日(水)

A6グリットの土坑より管玉1点、ガラス小玉数点出土、また鉄製品も出土。鉄製品はぼろぼろの状態のため何であるかは不明。また隣接する土坑内より一部を欠く勾玉が検出された。今回の調査で土坑は12基検出された。

11月18日(木)

A7グリットの円形の落ち込みは、落ち込み部分の周壁に焼土、内部に多量の土器片が出土。特に中央部分の土器は押しつぶされた状態であった。特殊遺構か。本日でB区の調査は終了した。

11月19日(金)

本日よりC区の調査に入る。黒色土層より弥生土器が出土したが、出土状況はまばらである。北側部分はB区南側から礫層が連続するの、攪乱された状態であった。

11月22日(月)

黒色土層に円形の黄色土の落ち込みがみられるが、遺構であるか不明。朝から小雨が続き11時ごろ本格的に降り出したため、調査は午前中で中止とした。

11月24日(水)

C調査区はA区の北側部分と同様に調査区全体に礫層と砂層が確認された。このため遺構があるとすれば、この礫間にあると考えられた。

11月25日(木)

A2～B4グリットに柱穴状ピットを10数個検出。黒色土層を掘り込んだものと黄色土層(砂層)を掘り込んだものがあった。A6グリットの円形の落ち込みは礫層を掘り込まれたもので、黒色土層の掘り込みと茶褐色土層の掘り込みがみられた。

11月26日(金)

B4グリットに鉄製品(釘)出土。先週にも宋銭1点出土しており、珠洲系土器片も出土していることから中世の所産と考えられる。

11月29日(月)

前日の遺物に伴う遺構を検索したが、砂層を掘り込んであるため検出は難しい。楕円形にも見えるがはっきりしない。ただ内部より弥生土器10点ほど出土したので土坑の可能性もある。A9グリットに円形の落ち込みを検出したが、半分以上は東側調査区域外である。

11月30日(火)

A9グリットの落ち込みは楕円形を呈し、床面は黄褐色土層により貼床されていた。床面より弥生土器多数出土。

12月1日(水)

A6グリットの落ち込みを調査。柱状の炭化物が東側より放射状に倒れている状態で検出された。弥生土器の底部、胴部の一部も出土。

12月2日(木)

前日出土した弥生土器は、後期の壺、甕であった。C9～C10グリットの礫間にある黒色土にトレンチを入れたところ、2箇所土器片がまとまって出土した。また一面に炭化物が確認された。

12月6日(月)

この日は冬というのに春のような暖かさであった。A14～B14グリットの落ち込みの内部より焼土、土器片の出土があった。住居址であろう。C9～C10の落ち込みにも大量の炭が検出され、A6グリットの住居址と同様な状況であった。

12月8日(水)

今日中野市周辺の山々が雪化粧した。C13～C15グリットに弥生住居と平安住居?が一部切り合う状態で検出された。両住居址ともに西側調査区域外に続いているため全体形は不明。

12月9日(木)

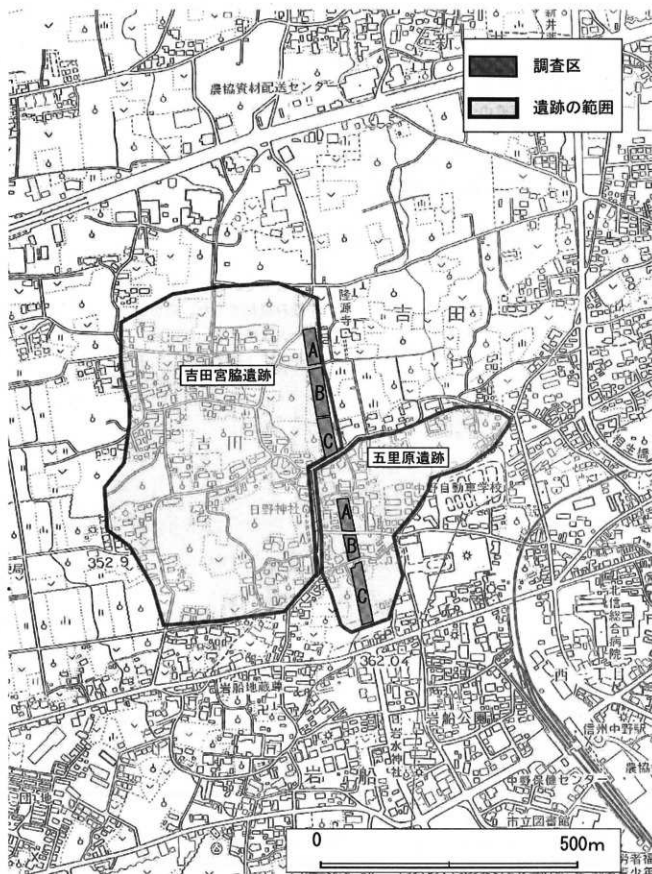
C9～C10グリットの住居址より紡錘車が1点出土。前日検出した平安期の住居址内より焼土を検出。

12月10日(金)

今日は平地でも初冠雪となり、調査を午後開始した。調査区を整備し写真記録を行った。

12月13日(月)

調査区全体の平板測量、レベル測量、層序の測量を行った。機材搬送し、本日で全調査を終了した。



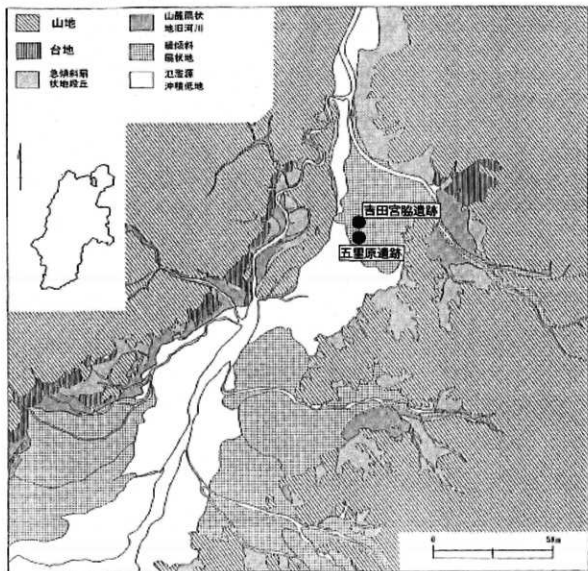
第1図 調査区の設定

第2章 遺跡の位置とその周辺

第1節 遺跡の位置と自然環境

吉田宮脇遺跡と五里原遺跡は隣接する遺跡である。ここでは一括して触れることとする。吉田宮脇遺跡は長野県中野市大字吉田字薬師前ほかに、五里原遺跡は長野県中野市大字吉田字五里原に所在する。両遺跡は、志賀高原に源を発する夜間瀬川により形成された中野扇状地扇尖部に位置する。遺跡の所在する中野市は、北は高社山火山群が屏風のように聳え立ち、東に箱山・鴨ヶ岳・雲井嶽、南は雁田山の稜線をもって限られ、西は斑尾山の稜線と千曲川をもって他市町村との境となっている。

北から南西に裾野を開く高社山は、途中裾野を夜間瀬川によって遮られる。その夜間瀬川により形成された中野扇状地は南北に大きく展開し、延徳沖低地に連なっている。扇状地末端は古来より豊富な湧水に恵まれ豊かな水田地帯となっているが、扇尖部は地下水が低いため生活用水や田畑の用水を得るのに多くの苦労を積み重ねてきた。近世初期、先人達の幾多の努力により用水路が整備され、近年では果樹の一大産地となっている。



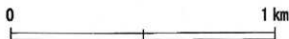
第2図 遺跡の位置

第2節 周辺の遺跡

中野市の遺跡は現在 242 を数え、旧石器時代から中世まで多岐にわたる。山間部と夜間瀬川扇頂部を除きほぼ市内全域に分布している。吉田宮脇遺跡・五里原遺跡が所在する夜間瀬川扇状地扇尖部の遺跡は、弥生時代後期及び平安時代の遺構・遺物が発見される共通点をもつ。周辺の遺跡の詳細は、第3図のとおりである。

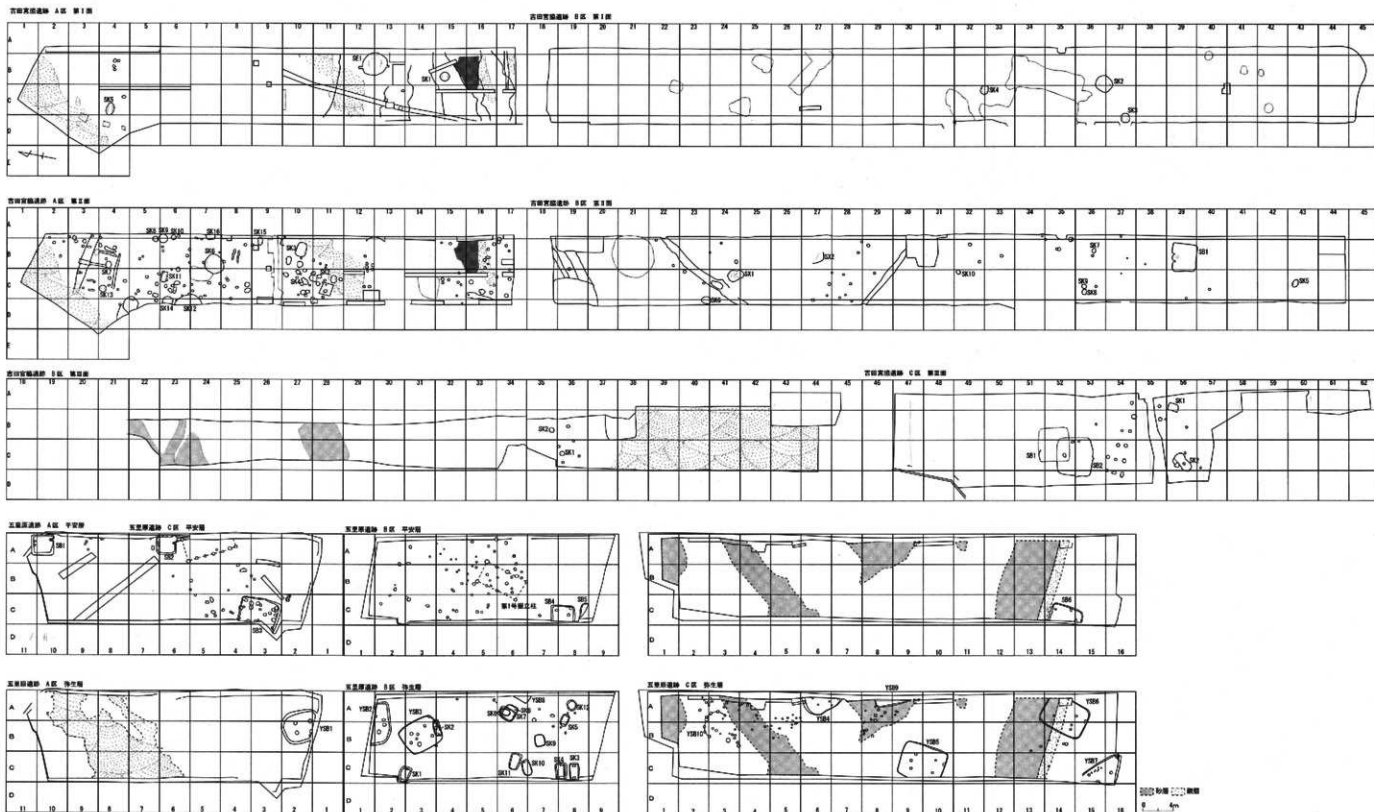


第3図 周辺遺跡



(表) 吉田宮脇遺跡・五里原遺跡周辺の地名表(『中野市遺跡詳細分布表』より)

遺跡番号	遺跡名	所在地		遺構・遺物	調査の有無文献	備考	
		大字	字				
22	新保遺跡	新保	中野道	(平)土師器、須臾器			
41	中野遺跡	更科	中郷・南郷	(編)前期土器(平)土師器			
42	然伏山一乗院跡	更科	南郷	(中)		法蓮寺故地	
43	上の山古墳	更科	上の山、野藪	(古)古墳			
44	下小田中遺跡	小田中	東屋敷、西屋敷他	(弥)後期土器 (古)土師器、須臾器 (平)灰軸陶器、須臾器			
45	光念寺古墳	小田中	東屋敷	(古)古墳		現在墓地	
46	上小田中遺跡	小田中	前畑、市道、東田	(編)土器片、打石斧	有(S46,19,10年)		
			尾敷添ほか	(弥)中期土器、扁平片刃石斧、 打製石器、磨石 (古)堅穴住居、土師器 (平)住居址、土師器 (中)古銭	22,62,67,139,146		
47	北越巻遺跡	更科	北越巻	(編)中期土器			
48	伊勢山下遺跡 (更科裏の山遺跡)	更科	裏山、御座石下	(編)単・前土器、打石斧、磨石斧、 石鏃、石皿、凹石	有(S43年) 22,58		
49	姥懐遺跡	小田中	姥懐	(平)土師器	有(S41,43年) 58,66		
50	姥懐山古墳	小田中	姥懐	(古)古墳(径17m、高1.5m)	有(S42年) 11,22,50,96	消滅	
51	上小田中墓塚	小田中	姥懐	(中)円形、墓石 (編)前・後期土器、打石斧、 磨石斧、石鏃	有(S56年) 91		
52	普代遺跡	中野	普代、如法寺	(弥)中・後期土器 (古)土師器 (平)土師器			
55	高梨氏城跡	中野	小館	(中)土器(方形)、空罎、車郭 埴物跡、井戸址、溝跡 土師器、陶器、珠洲焼、 磁器、播鉢、古銭、釘	有 (H11,2,3,4,6,10,11年) 89,107,111,112,115, 127,144,147	県指定史跡 (鴨ヶ敷城跡と一帯) (S44.7.3指定)	
56	中野泉片跡 (中野種屋跡)	中野	旧庁、中町下	陣屋井戸、石垣		県指定史跡 (S39.11.26指定)	
57	帯之巻城跡	中野	帯之巻、栗橋下	(中)			
66	五加遺跡	中野	五箇、西条境、谷地跡	(平)竪穴式住居(石組カマド) 須臾器、土師器	62		
67	西条東屋敷遺跡	西条	東屋敷跡	(弥)中期・後期土器、石鏃	有(H10年)		
				(古)初期・中期土器 (平)住居址、製鉄遺跡 土師器、須臾器、灰軸陶器、 骨金具、鉄釘 (中)住居址、溝跡、井戸址、湧泉跡 凹石、播鉢、石臼、茶臼、 磁石、壺、釘、古銭、 陶磁器、かわらけ	62,145		
68	西条長尾塚遺跡	西条	長尾塚	(平)土師器	62	西条長尾塚遺跡を改称	
69	西条・岩船遺跡群	西条	笠屋敷、枝垂松他	(弥)住居址、土壘墓、土壇、溝跡、 棺、後期土器、ガラス玉	有(H11,2,3,4,5,6,7年)		
			岩船	道添、宮上、西条境	(平)住居址、土壇 土師器、須臾器	109,138,145	
					(中)一花埋納銭… 第1号埋納銭(木箱、約34000枚) 第2号埋納銭(甕、調査中) 第3号埋納銭(木箱、約100枚)		
					(弥)太形鎧刀石斧、有柄石鏃 (平)土師器	62	
69-2(71)	岩船氏屋敷跡	岩船	西条境	(中)古銭、壺、甕(珠洲)			
69-3(73)	岩船岩神社遺跡	岩船	道添、宮上、西条境	(弥)中・後期土器 (平)住居址(同様)、土師器	62		
70	三好町遺跡	西条	長尾塚	(平)土師器	62	地下1.2m	
72	岩船遺跡	岩船	中島、尾敷添	(弥)後期土器 (平)土師器、黒書土器「天」、古銭	28,34,62		
74	荊町遺跡	中野	岩船境ほか	(弥)後期土器	62	地下2.8m	
75	五里原遺跡	吉田	五里原	土壘跡			
76	吉田宮脇遺跡 (宮、吉田屋敷下、 吉田立道遺跡)	吉田	宮脇、葉師前、森下他	(弥)後期土器、堅穴住居 (平)土師器、須臾器、蔵骨器 (中)蔵骨器(珠洲)	59,62		
				(弥)後期土器 (平)土師器			
77	屋敷遺跡	吉田	屋敷	(平)土師器			



第4図 グリットの配置と遺構の分布

第3節 層序

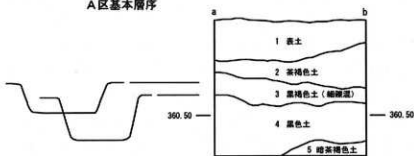
吉田宮脇遺跡・五里原遺跡の層序は、基本的には上層から表土（耕作土）—黒褐色土層（暗茶褐色土層）—黒褐色土層—黒色土層—黒褐色土層（暗茶褐色土層）—黄褐色粘土層（地山）に大きく区分される。吉田宮脇遺跡C区南端～A区北側部分、B区南端～C区は、黒色土層の下層が砂礫層、砂層が地中深く堆積する。これは、小河川の氾濫が幾代にもわたり続き、黒色土層の下層を押し流したことを物語っている。

縄文・弥生時代の遺物・遺構は黒色土層から、平安時代～中世の遺物・遺構は上層の黒褐色土層（暗茶褐色土層）から検出されるが、大小さまざまな礫を含む黒色土層からの遺物の出土状態はこれに当てはまらない。

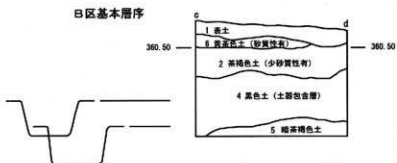
五里原遺跡



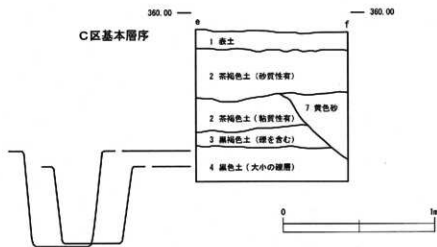
A区基本層序



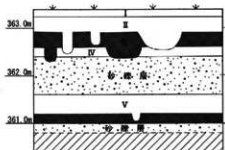
B区基本層序



C区基本層序



吉田宮脇遺跡 基本層序



- I. 表土 (耕作土1)
- II. 耕作土2
- III. 黒褐色土 上面が中世の遺構埋蓋面である。
古代の遺物包含層
- IV. 暗褐色土 上面が古代の遺構埋蓋面である。
古生の時代の遺物包含層
- V. 黒色土 古生時代の遺物包含層
- VI. 黒褐色土 上面が古生時代の遺構埋蓋面である。

第5図 各調査区層序模式図

第2編 五里原遺跡の調査

第1章 縄文時代

第1節 遺物

今回の調査で出土した縄文時代の土器は、いずれも後期に属するものと考えられる。完形品はなく、三調査区合わせても30数点ほどである。遺構も検出されていないことから、一括してこの時代の所産として取り扱い、簡単に説明をしておきたい。

(1) 土器 (第6図)

A群 (第6図1~3)

1は大きくくびれた胴部に大きく深い明瞭な沈線で曲線的な文様を描く。沈線間は無文である。2も深い明瞭な沈線で曲線的な文様を描いており、1と同一個体と思われる。3は口縁部にJ字状の沈線を施文する。沈線間は無文である。称名寺式の深鉢と考えられる。

B群 (第6図4)

4は単節縄文と沈線の区画文様である。縦位に縄文を施し沈線で区画し、下部の二条の沈線間は無文としている。薄茶色を呈し、焼成は良好である。

C群 (第6図5~7)

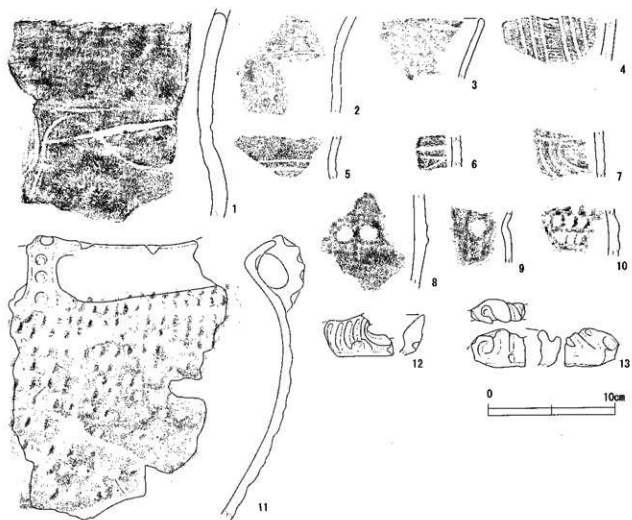
沈線のみを施す土器である。5は横位に、6、7は、それぞれL字形、U字形に施文する。いずれも小片のため部位は不明。いずれも薄茶色を呈し、焼成は良好である。いずれも堀之内様式に比定される。

D群 (第6図8~11)

棒状工具で刺突文を施文する土器をこの類とした。8は部位は不明であるが、横位に隆帯を貼付し、隆帯に棒状工具で刺突文を連続させている。9は外反する口縁部に刺突文を施す。薄手の土器だが焼成は良好である。10は小片のため部位は不明だが、11と同形態で施文される。同一個体と思われる。暗茶色を呈し、焼成は良好で堅い。11は外反する口縁部の無文帯に橋状把手、胴部全面に刺突文が施される。刺突文は頸部に近いほど細部に施され、胴部下半では荒くなる。胎土はややもろいが、焼成は良好である。10、11は三十稲葉式土器と考えられる。

E群 (第6図12~13)

口縁部に波状口唇部に刺突穴とC字形の文様を有するものをこの類とした。いずれも肥厚させた口縁部端に棒状工具により施文している。胎土は薄茶色を呈し、焼成は良好で堅い。いずれも堀之内様式に比定される。



第6図 縄文時代の土器

第2章 弥生時代

第1節 遺構

本調査で検出された遺構は、竪穴住居址8棟、墓と思われる土坑11基、その他の土坑1基が検出されている。住居址はいずれも黒色土層を掘り下げて構築されており、黒色土層の下層が礫を含む砂層のため黄褐色土を含み堅く貼床されている。土坑（SK）は小口側板跡が明瞭な木棺墓5基、小口側板跡をもたない土坑墓6基、その他の土坑1基に区分される。

1. 竪穴住居址

(1) 第1号住居址（第7図）

調査区北側B2グリットで検出。南側一部が調査区外の道路下に続くため不明だが、おおよそ東西4.2m、南北が推定5mの隅丸長方形と推定される。検出面からの掘り込みは45cmと深い。遺構内に人頭大の礫が床面、周壁まで大量に混入し周壁の一部が壊されている。床面は礫の混入により少し凹凸があるが、一部堅く貼床されているのがみられる。柱穴としてP1、P2、P4、P5があげられる。深さは40cm程で、柱間寸法は東西1.2m、南北2m程で規則正しい。柱穴内壁は礫で円形に覆われている。貼床面の下層は砂礫層のため、柱の安定を考えたものであろうか注目される。

遺物の出土は壺（第26図2～4、7、9、第27図15、第28図21、22、23）、甕（第29図31、第30図39）、高坏（第31図54、58）、甑（第31図70）がある。中でも壺、甕がほぼ中央につぶれた状態でまとまって出土している。焼土も中央に検出されるが、炉は確認できなかった。大量の礫の混入により壊されたのかもしれない。

(2) 第2号住居址（第8図）

調査区北端のA1～B1グリットで検出。東西5mの隅丸長方形と推定されるが、約半分近くが北側道路下にあるため南北の長さは不明。柱穴としてP1～P2とP3～P4の柱間寸法がともに1.2mで規則正しいが、配列はどうであろう。1号住居址柱穴と同様に内壁が礫で円形に覆われている。床面は堅く貼床がされて平坦である。焼土が床面に検出されるが炉は確認できない。遺物の出土は甕（第30図38）がある。

(3) 第3号住居址（第9図）

B2グリットで検出。本調査で唯一全体形を把握できた住居址である。南北5m、東西4.2mの隅丸長方形を呈する。南側の一部がSK3に切られている。床面は砂礫層の上に黄褐色土を含み堅く貼床される。P1、P3、P4、P8の柱間寸法が東西1.7m、南北2mと規則正しく、周壁に接するP5、P6とともに関係するものと考えてよいであろう。P1、P3、P4、P8は内壁が礫で円形に覆われている。焼土は検出されたが炉は確認できない。

遺物の出土は、ミニチュア土器（第31図68）1点であるが、B3グリットの隣接する地点から高坏（第31図52）が出土する。

(4) 第4号住居址（第10図）

A6～A7に検出。隅丸長方形を呈するが、大半は東側調査区域外のため規模は不明。住居址の大部分は茶褐色土層から黒色土層まで掘り込まれているが、その範囲は周囲が礫層に囲まれているため、炭化物の分布状況から周壁を検出していった。検出面からの掘り込みは30cmと深い。黒色土層内の礫が周壁内部まで入り込んでいる。床面に柱状の炭化物が東側中

中央部に向け放射状に集結しているのが検出された。炭化物の残存状態がきわめてよい。人為的か或いは自然なのかは不明だが、何らかの原因で火災に遭遇し、すぐに埋められたのであろうと推定される。柱穴としてP1～P5があげられる。P1とP2、P4とP5の柱間寸法が1.2m程であり、規則正しい。

遺物は焼土とともに甕（第29図27、32）、鉢（第31図61）が出土している。

(5) 第5号住居址（第11図）

茶褐色土層から黒色土層まで掘り込まれ、外周が礫層を掘り込んでいる。1号住居址とまったく同様の形態を示している。一部調査区域外であるが、その規模については容易に推定できる。長径6m、短径4.8mの隅丸長方形を呈する。柱穴として中央部にあるP2、P3、P4、P6があげられる。柱間寸法が東西1.7mと1.9m、南北2.8mと2.9mと若干差があるが、規則的な方といえる。1号住居址と同様に柱状の炭化物が東側中央部に放射状に倒れているように検出された。この住居址も火災に遭遇したのであろうと考えられる。

遺物は壺（第27図11、13）、甕（第29図28、29、33）、台付壺（第31図63）、高坏（第30図42、48、49、第31図53、55、57）、紡錘車1点（第31図72）が出土している。

(6) 第6号住居址（第12図）

長径6m、短径4.2mの隅丸長方形を呈する。検出面からの掘り込みは16cmと浅い。中央部に大量の礫が流れ込み、内部の一部が攪乱されている。柱穴は周壁に接するP5～P7、内部のP1、P3、P4が推定される。焼土は検出されるが、炉は確認できない。

遺物の出土は壺（第28図19）、甕（第29図25、30、36）、高坏（第30図44、50）がある。

(7) 第7号住居址（第13図）

内部に大量の礫の流れ込みがある。大半は調査区域外にあり、北側部分を7号住居址に切られているため規模は不明。床面は堅く貼床がされ、焼土が検出される。柱穴としてはP1、P2、P4が推定される。

遺物の出土は壺（第26図5）、甕（第29図26）、高坏（第30図47）がある。

(8) 第8号住居址（第14図）

A5グリットに一部検出。大半が調査区域外のため全体形は不明であるが、周壁角がややカーブを呈していることから隅丸長方形と推定した。床面は平坦に貼床がされており堅緻である。少量ではあるが弥生後期土器片が出土していることから住居址の一部と判断した。

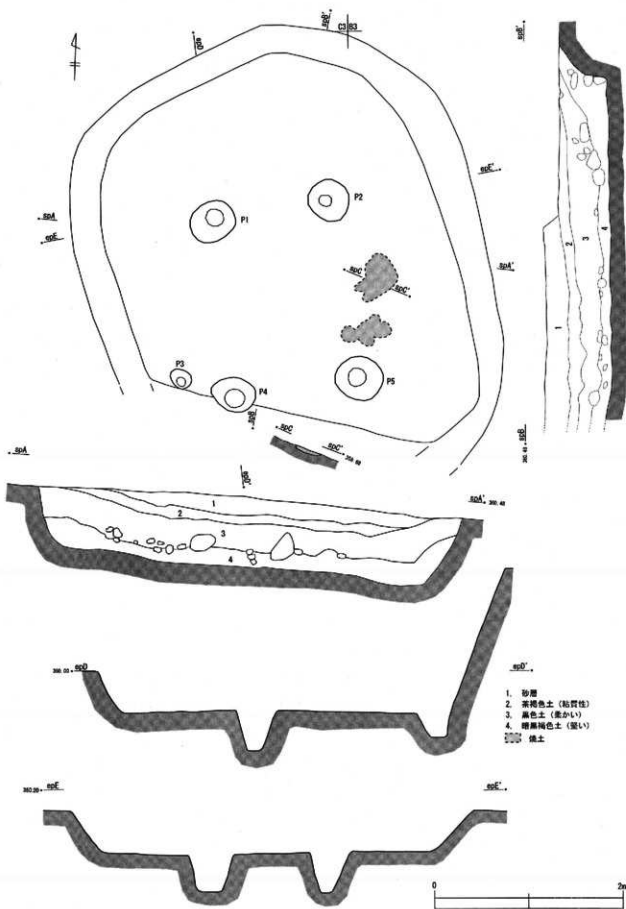
(9) 第9号住居址（第15図）

1号住居址に並行して4mほど南側A8～9グリットに検出。形態から隅丸方形を呈すると思われるが、大半が東側区域外のため規模は不明。検出面からの掘り込みは浅い。床面は堅く貼床がされている。

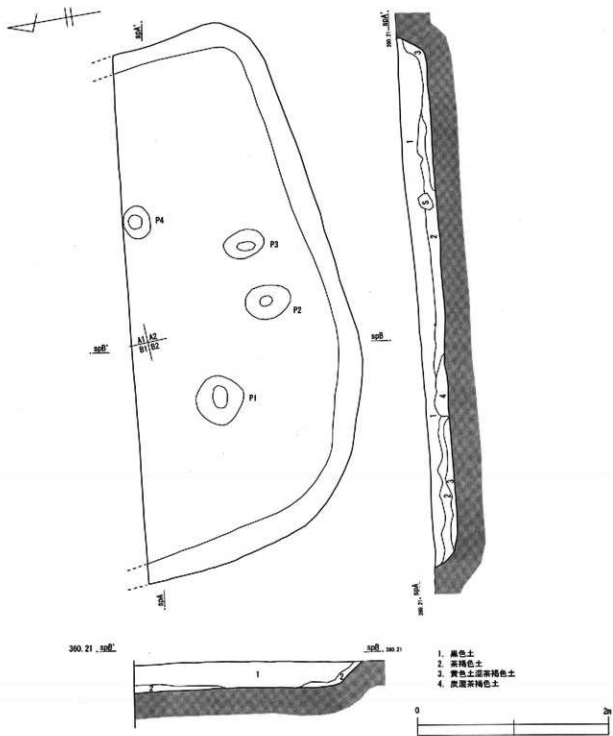
(10) 第10号住居址（第15図）

本住居址は、大量の礫を含む黒色土層間を掘り込んで構築されている。周壁の検出はきわめて困難であるため、土器の出土状況、焼土が検出された位置、柱穴の配置状況等により住居址とした。P11～P13、P16、P17、P19、P29が関係する柱穴と考えられる。南半部はP1、P23、P28が候補としてあげられるが、全体的に不足する。柱間寸法は90cm～1m程で、焼土、土器を囲むように隅丸方形または楕円形に配列されている。

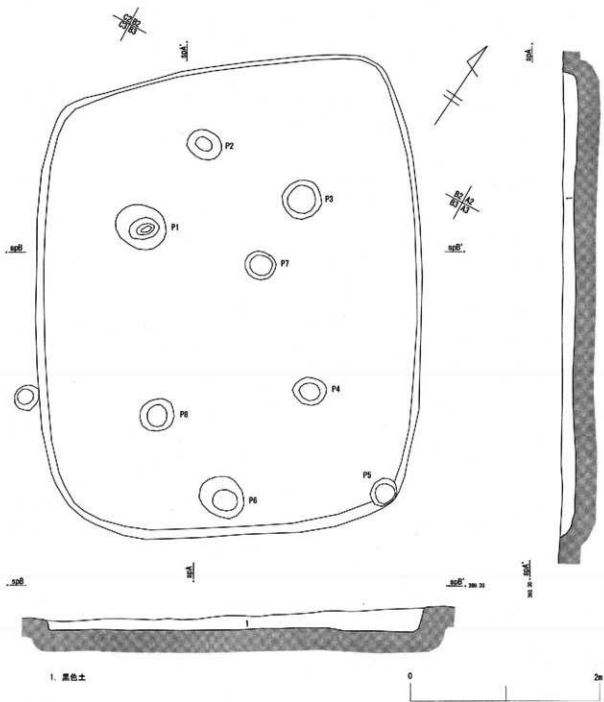
出土遺物に壺（第28図20）がある。



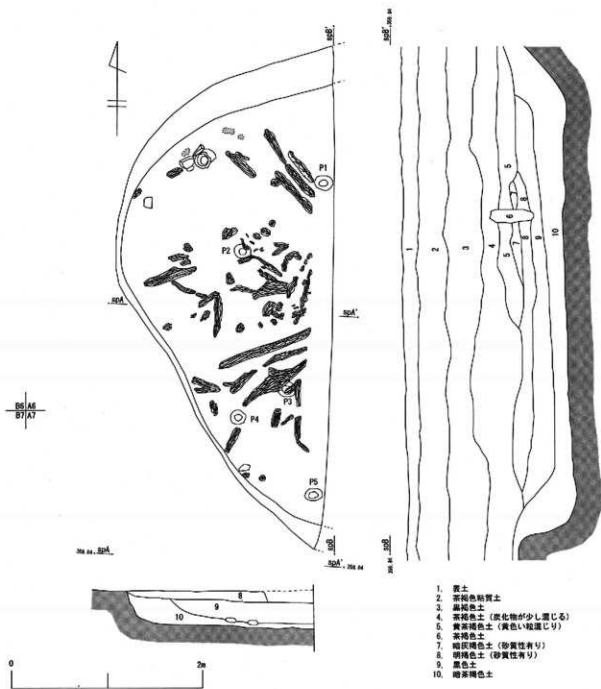
第7図 弥生時代 第1号住居址



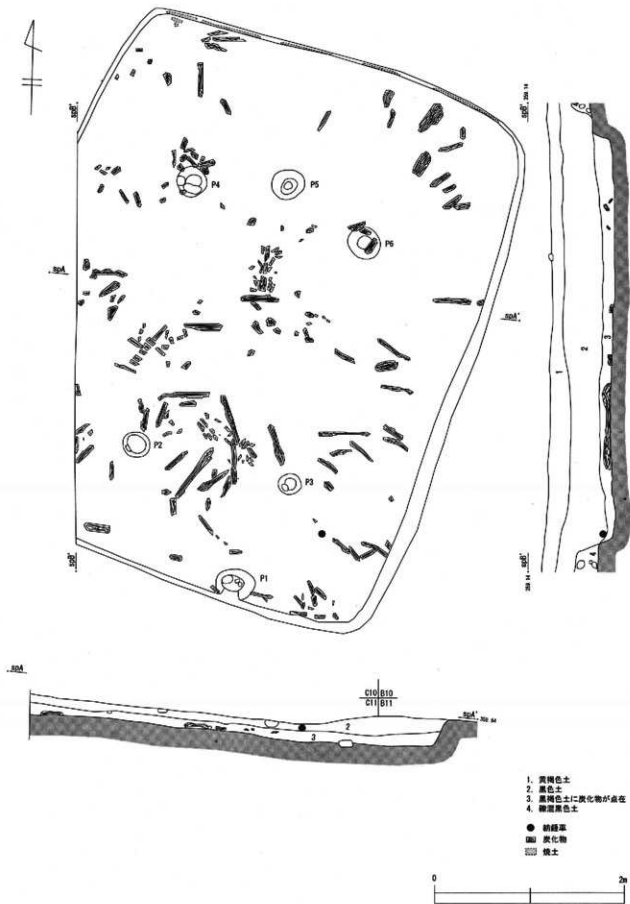
第8図 弥生時代 第2号住居址



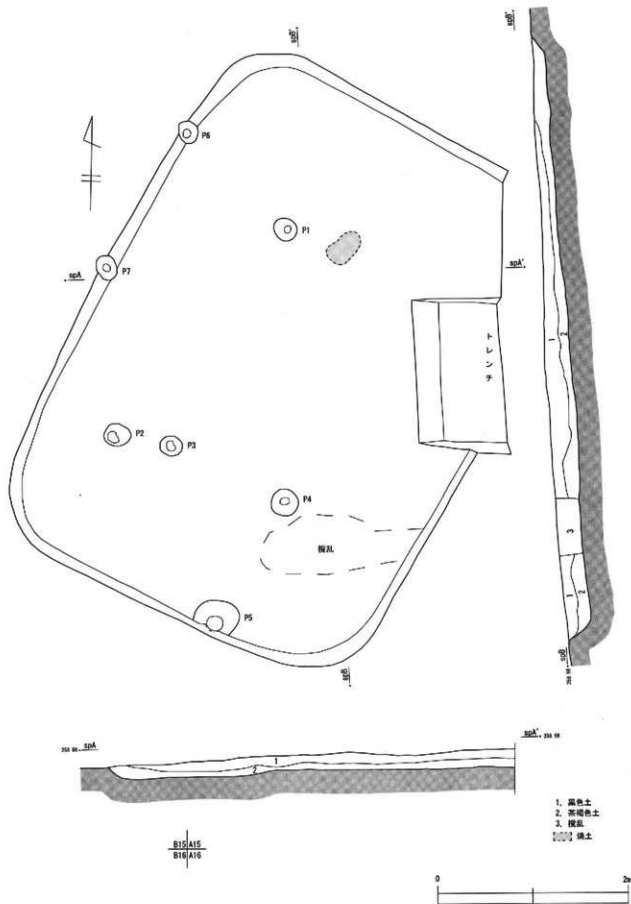
第9図 弥生時代 第3号住居址



第10図 弥生時代 第4号住居址

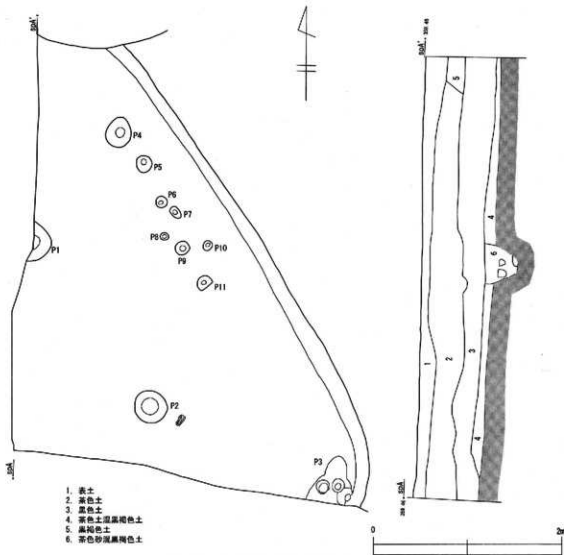


第11図 弥生時代 第5号住居址

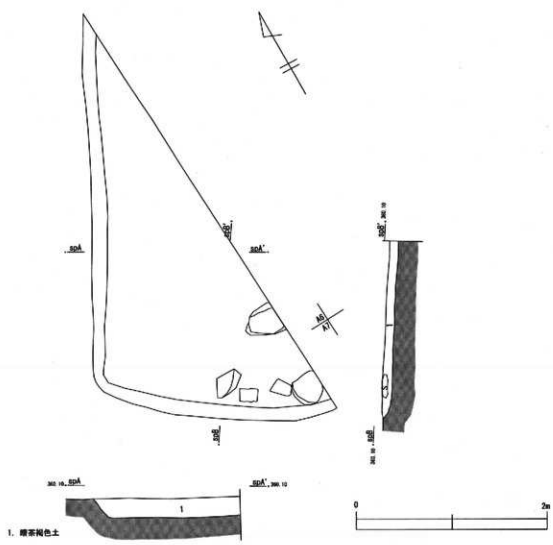


第12図 弥生時代 第6号住居址

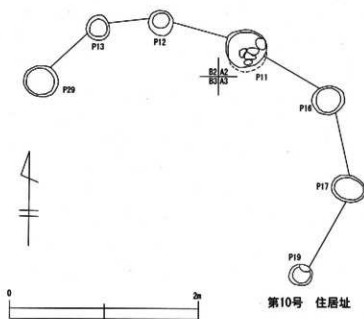
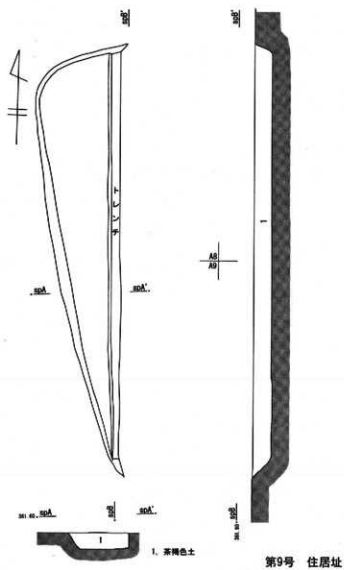
C14/B14
C15/B15



第13圖 弥生時代 第7号住居址



第14图 弥生时代 第8号住居址



第15图 弥生时代 第9号・第10号住居址

2. 木棺墓 (第 16 図)

(1) SK 1

C2~C3グリットで検出。南北 1.5m、東西 2mの楕円形を呈し、坑底は東側がやや膨らんでいる。検出面からの掘り込みは 20cm と浅く、小口側板跡の掘り込みも 10cm と浅い。

内部からの遺物の出土はないが、同グリットのC2より甕 (第 31 図 67)、高坏 (第 30 図 46)、鉢 (第 31 図 60) が出土している。

(2) SK 2

2号住居址の南側を一部切って構築されている。南北 0.9m、東西 2.1mのやや細長い楕円形を呈する。礫層を掘り込み2号住居址の周壁を切り込んでいるため、南側が若干検出不足かもしれない。検出面からの掘り込みは 20cm 程である。小口側板跡の外側壁面は平坦な礫を固定しており、小口側板の支えとして構築したのであろう。

(3) SK 3

南北 1.3m、東西 2.5mの楕円形を呈する。4号住居址に切られているためか検出面からの掘り込みは 12cm と浅い。小口側板跡の掘り込みも 10cm と浅いが、形態は明瞭である。ガラス小玉が 20 点 (第 32 図) ほど東側坑底で出土した。東が頭位か。土器片の出土はない。4号住居址検出時出土のガラス小玉 2 点 (第 32 図) はこの木棺墓に伴うものであろう。

(4) SK 4

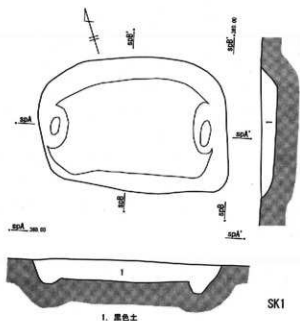
SK 4の北に隣接して検出。南北 1.5m、東西 2.5mの楕円形を呈し、大きさはSK 4とほぼ同規模であるが、南北がやや幅広である。掘り込みは 25cm とSK 4に比べ段違いに深い。小口側板跡の掘り込みも深く明瞭である。長側板跡と思われる掘り込みが一部に確認されるが、深さ 1~3cm と浅くはっきりしない。

出土遺物は土器片であるが、図示できるものはない。

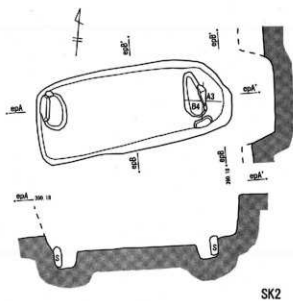
(5) SK 5

南北 1m、東西 1.6mの楕円形を呈する。やや小型であるが、遺物の出土は土器片が小片で図示できるものはないが、ガラス小玉 5 点 (第 32 図)、管玉 2 点 (第 32 図 5)、鉄釧 1 点 (第 32 図 2) とバラエティに富んでいる。いずれも出土地点は東側坑底である。やはり東が頭位か。小口側板跡も明瞭で、長側板跡と思われる溝も一部に検出される。全体の掘り込みは 10cm と浅いが、小口側板跡は 25cm 程で深い。

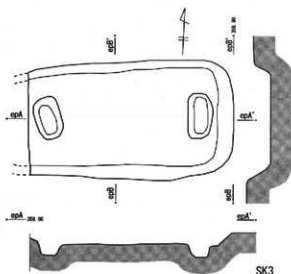
高坏 (第 30 図 45) がC8グリットで出土している。



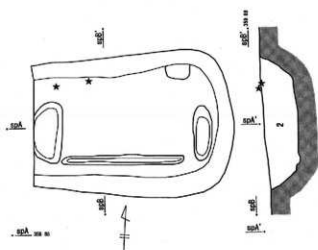
1. 黒色土



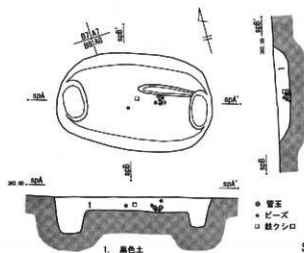
SK2



SK3



SK4



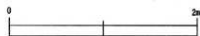
1. 黒色土

● 管玉
* ビーズ
□ 鉄ラシロ

SK5

1. 黒色土と黄色土の混じり
2. 黒色土
3. 赤褐色土
4. 黒黄褐色土

* ビーズ



第16図 弥生時代 木棺墓

3 土坑墓 (第 17 図)

(6) SK6

SK7、SK8の上層に検出。黄色土層から黒色土層に掘り込まれるため今ひとつはつきりしないが、弥生後期の台付小型甕 (第 31 図 62)、ミニチュア土器 (第 31 図 65) の一部が出土した面から検出した。南北 1.3m、東西 0.8mの楕円形を呈する。隣接するA5グリットに弥生後期の高坏 (第 30 図 43)、ミニチュア土器 (第 31 図 64) が出土した。

(7.) SK7

SK6の下層で検出。SK8に切られている。南北 2.1m、東西 1.5mの方形に近い楕円形と推定される。検出面からの掘り込みも 13cmと浅い。SK6がこのSK7内にすっぽり入るため、SK6はSK7の一部とも考えられ、SK6出土の台付小型甕 (第 31 図 62)、ミニチュア土器 (第 31 図 65) がSK7の遺物である可能性が高い。

(8) SK8

SK6をほぼ 90° 方向に切って掘り込んでいる。南北 1.8m、東西 2.1mを測り、検出面からの掘り込みは 30cm程ある。SK7と同様に方形か楕円形か判定しかねる形態を呈している。土器の出土はないが、坑底で径 8cm程の鉄釧 1点 (第 32 図 1) が発見されている。

(9) SK9

B7グリットに検出。南北 1.4m、東西 1.5mの正方形に近い形を呈する。角が若干丸みを帯びていることから隅丸方形といってもいいのかもしれない。検出面からの掘り込みは 20cm程である。遺物は勾玉 (第 32 図 6) 1点のみで、土器片の出土はないが、B7グリットで壺 (第 27 図 12、13) が出土した。

(10) SK10

SK9の2m南C5～C6グリットに検出。南北 1.2m、東西 2.1mの楕円形を呈する。検出面からの掘り込みは 20cmとやや浅い。小口側板跡らしき掘り込みも見られるが、浅く偏った掘り込みのためはつきりしない。遺物は弥生後期土器片が出土したが、小片であり図示できるものはない。

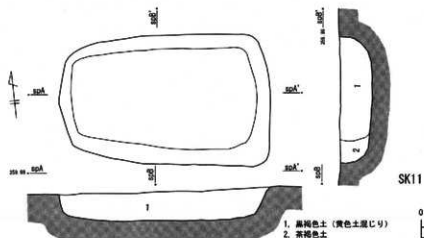
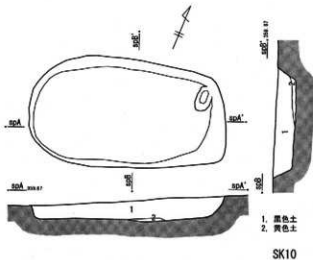
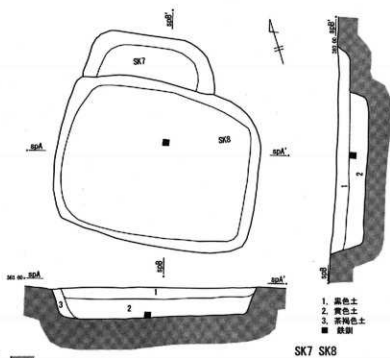
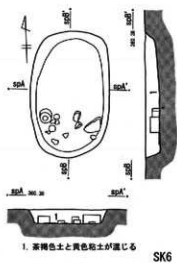
(11) SK11

SK10の北に隣接して検出。南北 1.4m、東西 2.2mの楕円形を呈する。東側坑底がやや幅広となっている。検出面からの掘り込みはSK10に比べ少し深いが、小口側板跡らしき掘り込みは検出されない。内部のP41は掘立柱建物址の一部と思われる。内部より弥生後期の土器小片が出土した。

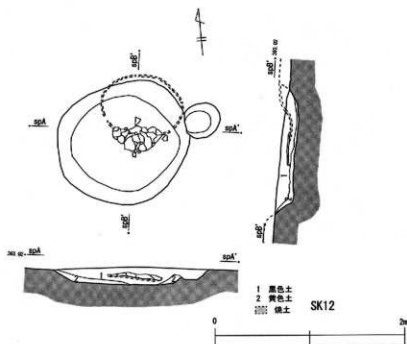
4 土坑 (第 18 図)

(12) SK12

SK5の東 50cmに隣接して検出される。吐出部を持つ円形を帯びた径 1.4mほどの規模で、検出面からの掘り込みは 10cmと浅く、すり鉢状を呈する。中央部と周壁には焼土が検出されている。中央部に弥生後期の壺 (第 26 図 1)、甕 (第 29 図 34) が押し潰されたような状態で出土しているが、全形まで復元することはできない。形態からも土坑墓とは考えにくい。何か特殊な性格の土坑なのだろうか。



第17図 弥生時代 土坑墓



第18図 弥生時代 土坑

第3章 平安時代

第1節 遺構

検出された遺構は、竪穴住居址6棟、掘立柱建物址2棟がある。竪穴住居址は茶褐色層を掘り下げ構築されており、いずれもかまどを伴い、かまど及びその周辺から焼土が検出されている。掘立柱建物址については時代の特定は難しいことから、今回の調査において検出された遺構の年代を考慮し、この時代の遺構として取り扱うこととする。

1. 竪穴住居址 (第19図～第24図)

(1) 1号住居址 (第19図)

住居址の東北部は調査区域外のため規模は不明。かまどと南側周壁より方形プランを呈すると考えられる。検出面よりの掘り込みは35cm程ある。かまどは東南部に構築され、かまど内部を覆うように大量の甕口辺部片(図版9)が出土する。かまどの構築材として使用されたものか。かまど上部と内部より焼土が検出される。西側の周壁は大量の礫により破壊されはっきりしない。ピットとしてP1、P2が検出されたが、柱穴としては物足りない。

遺物は黒色土器片(第33図8)、土師器片(第33図23)甕(第34図42、45、第35図48、51、54、56、57、第36図61、64～第37図73)小型甕(第37図74、77)が出土しており、住居の規模の割合に多い。

(2) 2号住居址と柱穴群 (第20図～第21図)

1号住居址の南約13mで検出された。東側周壁は調査区域外のため確認できない。かまどの位置から南北2.7m、東西2.4mの方形プランと推定したが、きわめて小規模である。掘り込みも検出面より25cmと浅い。かまどは東南端に構築され、南側に煙道を有している。煙

道はかまどより南へ拳大の礎を幅 25 cm ほどの間隔で整然と立てられ、人頭大の礎を蓋にする構造で見事に構築されている。住居址内の P1～P3 は、掘り込みが極端に浅く柱穴なのか判断としない。一方住居址外側の柱穴群をみると、P10～P24 の列と P9、P22 列がほぼ平行に配列されている。P10 の北側には柱穴らしきピットは検出できなかった。P9 と P22 の東側列は、P9 南側の調査区域外に柱穴があると考えられる。P9 と P22 の柱間寸法は 4 m 程ある。P14 の西の P25 はどうであろう。P10～P24 列と直角に位置し、柱間寸法は 2.1 m である。ただ列をなす柱穴は見つかっていない。P22 の東側の P23 も候補にあげられるが、これも単独のためどうであろうか。P10～P24 列の P10～P15 は、柱間寸法がほぼ 1.2 m で規則正しい。この柱穴群が建物址と推定すれば、2 号住居址はこの建物址に付随する施設なのかもしれない。

遺物はかまど内外、煙道内から焼土とともに、土師器坏（第 33 図 22）、甕（第 35 図 46）、須恵器坏（第 33 図 29）が出土している。

（3）3 号住居址（第 22 図）

調査区南西端部に検出された。一辺が 5.2 m の方形プランを呈する。約 1/3 近くは、西側調査区域外にあるため全体の規模は不明。検出面よりの掘り込みは 40 cm とやや深い。多くのピットが検出されたが、柱穴として周壁に接する P1、P2、P3、P10、P15、P16 があげられる。かまどは東側中央よりやや南寄りに頭大の礎により構築され、かまどの東部は縦に半円形の煙道らしき掘り込みがみられる。焼土は住居址内に全面的に、炭化物は住居址内全面と P1、P2、P3 に検出され、この住居址が火災に遭遇した可能性も想定される。

遺物はかまど周辺に黒色土器坏（第 33 図 7、10～20）、土師器坏（第 33 図 24）、甕（第 35 図 47、49、50、53、55、第 36 図 63、第 37 図 78、79）が出土している。

（4）4 号住居址（第 23 図）

調査区の C6、C7 に検出された。約半分は西側調査区域外にある。SK4、SK5 の上層に構築される。一辺が 3.6 m の方形を呈する。かまどは頭大の礎を数個対に立てた簡素な造りで、東側には排煙用の掘り込みがみられる。かまどを補充するように土器片が一部出土している。柱穴として P1～P3 が検出されたが、P1 と P2 が関係するものか。

遺物は黒色土器坏（第 33 図 1、3、4）、甕（第 34 図 43、44、第 36 図 58～60、62）と同位層にガラス小玉 2 点が出土した。ガラス小玉は下層の SK4 に共伴するものであろう。

（5）5 号住居址（第 23 図）

2 号住居址の南側に隣接して検出。住居址の南側は礎層で、住居址の大部分は削り取られている。茶褐色土層の掘り込みであり、残存した一部が方形を呈していることからこの時代の住居址と推定した。

遺物は黒色土器坏（第 33 図 5）が出土した。

（6）6 号住居址（第 24 図）

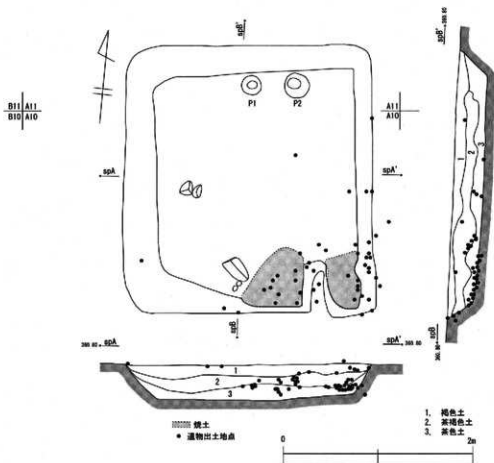
一辺が 4.3 m の方形を呈するが、約半分は調査区域外にある。床は堅く貼床される。遺構面からの掘り込みは 20 cm と浅い。かまどは検出されていないが、内部東南部に焼土がかたまっただけで検出されたことから、かつてここにかまどがあったと推定される。周囲が砂礫層の状況を考えれば、住居址内部まで小河川の影響が及んだのであろうことが十分推測される。P1～P3 が検出されるが、掘り込みの深さから P3 のみが柱穴としてあげられる。

遺物は黒色土器坏（第33図2）、小型甕（第37図75）が出土した。

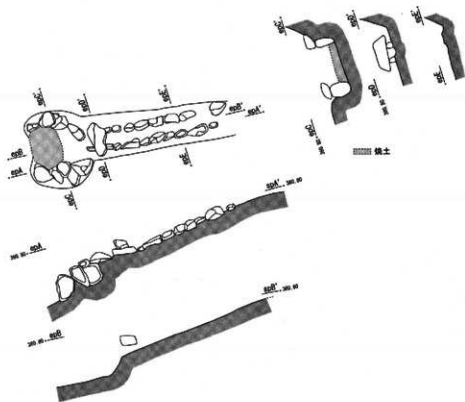
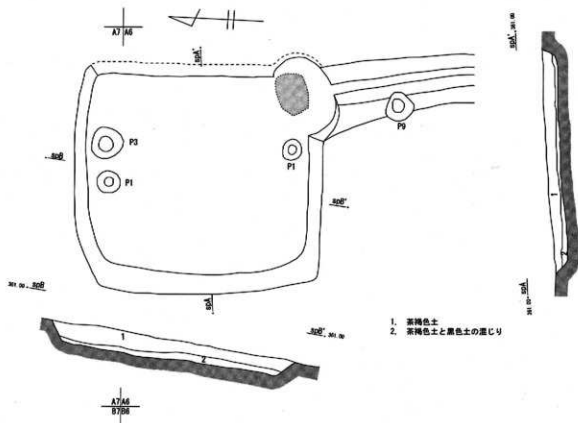
2. その他の建物址

(1) 掘立柱建物址（第25図）

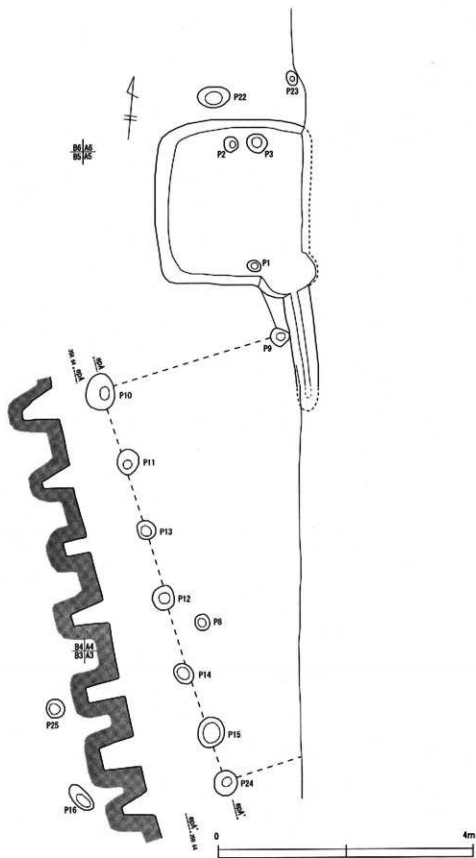
多くの柱穴が検出されたが、調査区のほぼ中央のP11、P14、P26、P29、P30、P33、P36、P40、P41、P44が掘立柱建物址1棟と推定される。南北5.8m、東西2.9mの規模で、柱間寸法は南北2.8m～2.9m、南北1.3m～1.5mとほぼ規則的な配列であり、掘り込みの深さも浅いもので49cm、深いもので55cmとあまり差がみられない。



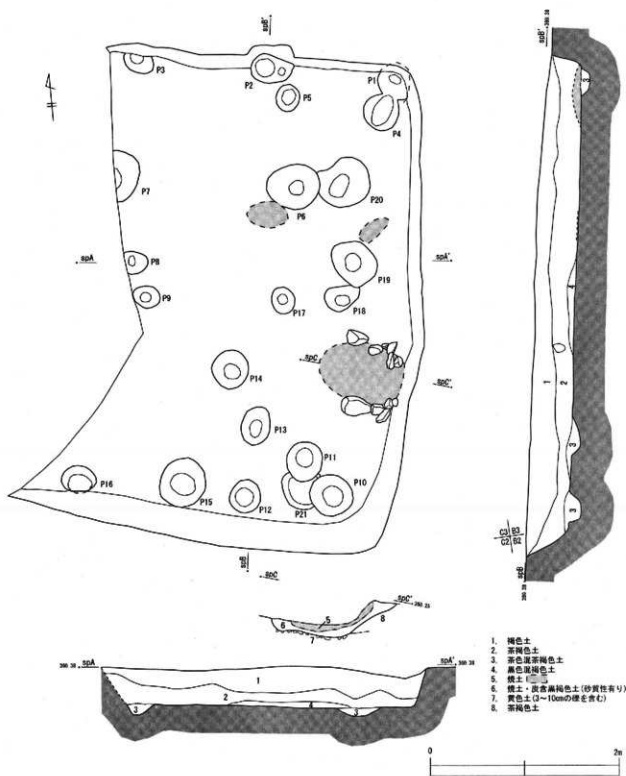
第19図 平安時代 第1号住居址



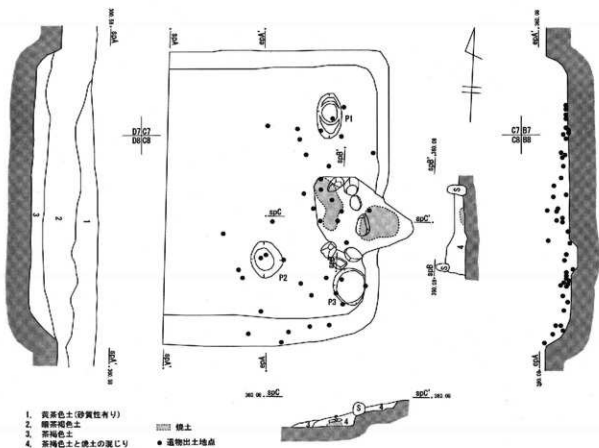
第20図 平安時代 第2号住居址とカマド



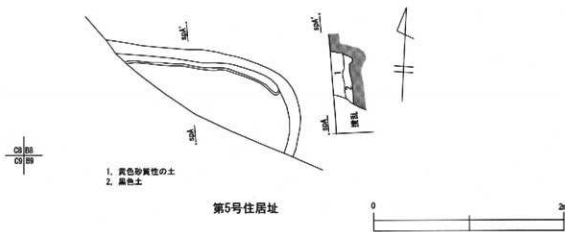
第21図 平安時代 第2号住居址と柱穴群



第22図 平安時代 第3号住居址

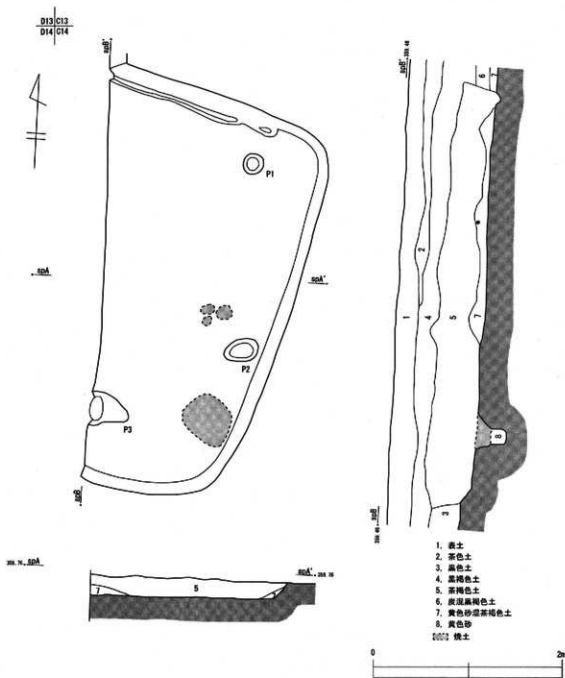


第4号住居址

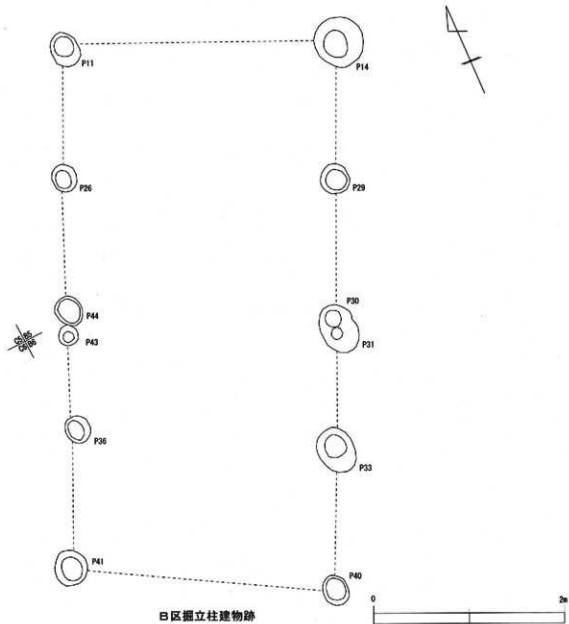


第5号住居址

第23図 平安時代第4号・第5号住居址



第24图 平安时代 第6号住居址



日区掘立柱建物跡

第25図 平安時代 第一号掘立柱建物址

第4章 弥生時代

第1節 遺物

土器、土製品、鉄剣、ガラス小玉、管玉、勾玉がある。土器は図化できるものは遺構内及び周辺のグリットからの出土品がほとんどで、遺構外の礫を含む黒色土層に出土するものは単体で、接合できるものは少ない。

1. 土器（第26図～第27図71）

出土した土器は、壺、甕、台付甕、高坏、鉢、甑、ミニチュア土器がある。以下器形ごとに分類し説明を加えたい。

壺は口辺部から胴部へ緩やかな曲線を描き移行する茄子形を呈するもの（1～14）、口辺部の外反が大きくなり、無花果形を呈するもの（16～18）、口辺部が朝顔形を呈し、口辺部から胴部へ屈曲は「く」の字型になるもの（19、20）に大きく分類される。茄子形を呈するものは胴部最大径が中位に位置し、口縁部が指でつまんだように立ち上がり内湾するもの（13）とまったくしないもの（5、11）がある。施文は頸部の櫛描直線文、胴部上半の波状文が主体であるが、鋸齒文（1、2、4、8、9、）と櫛描横羽状文（6）の施文が特徴的である。無花果形を呈するものは頸部がやや細く、口径が小さなノート状になり、胴中位よりやや下がった部分に胴部最大径があるが、明瞭な稜を形成していない。口縁部は指でつまんだように立ち上がり内湾する。施文は、頸部に口縁部に櫛描横走直線文と波状文が多いが、円板状突起の貼付するもの（16）もある。19、20は口辺部の外反がさらに大きくなり、施文は頸部にはT字文を施文する。16、17、22は口縁部端に櫛描横走波状文を、23は円板状突起を貼付する。21は壺の底部と思われる。胴部下半部から底部への緩やかに窄むが、明瞭な稜線は見られない。

甕は胴部最大径が上位にあり、若干肩をもち緩やかに底部に移行するもの（24～33）、胴部が丸みを帯び、胴部最大径が中位にあるもの（34～39）に分類した。口辺部が受け口状を呈するもの（21、22）と外反度がややおおいもの（23）がある。口辺部と胴部上半に櫛描波状文、頸部に簾状文を施文するが、円板状突起の貼付するもの（21）もある。若干肩をもつもの（24～28）は、口縁部端がつまんだように内湾する。29～32は口縁部端の内湾はみられず、胴部へ緩やかに曲線を描く。胴部最大径が中位にあるもの（34～39）は、口縁部が長く伸び、胴部に丸みを帯び緩やかな曲線を描いて胴部に至る。施文は口辺部と胴部上半に櫛描波状文、頸部に簾状文が主体であるが、円板状突起を貼付するもの（35）、口縁部に施文を省略するもの（第29図24、34）もある。39は出土場所、胎土、色調から35の底部と思われる。

高坏は口縁部が水平に伸びるもの（44～49）と内湾するもの（45～47）、内湾しないもの（42～44）がある。坏部は底部にかけ直射状に開き深く、収縮の度合いが大きいものがほとんどであるが、稜線を帯びるもの（49）もある。脚部は中空で、底部へやや外反した形態をとるものが多く、釣鐘状を呈するもの（52、53、57、58）と直射状に開くもの（51、56）がある。口縁部及び坏部はほとんどが施文されないが、口縁部に山状突起を四箇所に附し、坏部に横走櫛描直線文に直交する櫛描直線（T字文）を施文するもの（49）がある。

鉢は図化できるもの4点あげた。61は口縁部端が摘み上げたように内湾し、底部へは直射状を呈する。58～60は塊状にわずかに内湾する。60、61は底部が幅広く安定している。いず

れも底部以外全面赤色塗彩される。

台付甕は2点出土している。62は胴部が直線的であるのに対し、63は胴部に丸みを帯びる。施文は、頭部に櫛描直線文、口辺部と胴部上半は櫛描波状文が充滿する。

小型の土器、いわゆるミニチュア土器に分類されるものは6点(64~69)ある。外面が全面赤色塗彩され、壺か甕か区別がつかないもの(65、66)がある。施文は頭部のみに櫛描直線文が施されるものが多いが、まったく施文されないもの(66)もある。

甕は2点(70、71)ある。底部に0.9×1.1mmほどの孔がある。部分的にヘラ削りと横ナデによる光沢がみられる。

本遺跡の出土土器は、遺構内で比較的まとまって出土するが復元しても全体形を知り得る資料に乏しい。口縁部、頸部、胴部の特徴から全体形を推定したため、大まかな分類になってしまった。ただ、今回の出土土器は、従来の弥生時代後期の土器編年、所謂吉田式から箱清水式土器への多くの特徴を持ち、土器間に若干の時間的差異がみられることから、変遷過程を補う資料の提供が少なからずできたのではないかとと思われる。

2. 土製品(第31図72~74)

72、73は紡錘車である。1点は住居址内からの出土であるが、1点はA区磔間からの出土であり、不明瞭な点が多い。72は両面が平滑で、側面が丁寧にヘラ調整されている。全面的に煤が付着する。73は3/4近くを欠くが、中心に孔を持ち円形を呈することから紡錘車とした。側面がヘラ調整され、両平面に指圧痕がみられる。74は円形を呈し、平滑である。小片であり孔はない。

挿図番号	径 (mm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	重さ (g)	色 調	層 位	出土位置
第32図—72	47	12	9	31	暗褐色	床面	C区4号住居址
第32図—73	(78)	16	9	36	明茶色	黒色土層	A区C9磔間
第32図—74	36	8		12	明茶色	床面	A区4号住居址

3. 鉄釧(第32図1~2)

B区のSK5で1点、SK8で1点、いずれも坑底から出土した。形態から螺旋状鉄釧と思われるが、錆化が進み明瞭に判別できない。SK5出土のものは、径80mm、厚さ2~4mm、重さ50g、SK8出土のものは径が推定80mm、厚さ20~40mm、重さ140gを測る。

4. ガラス小玉(第32図3~5)

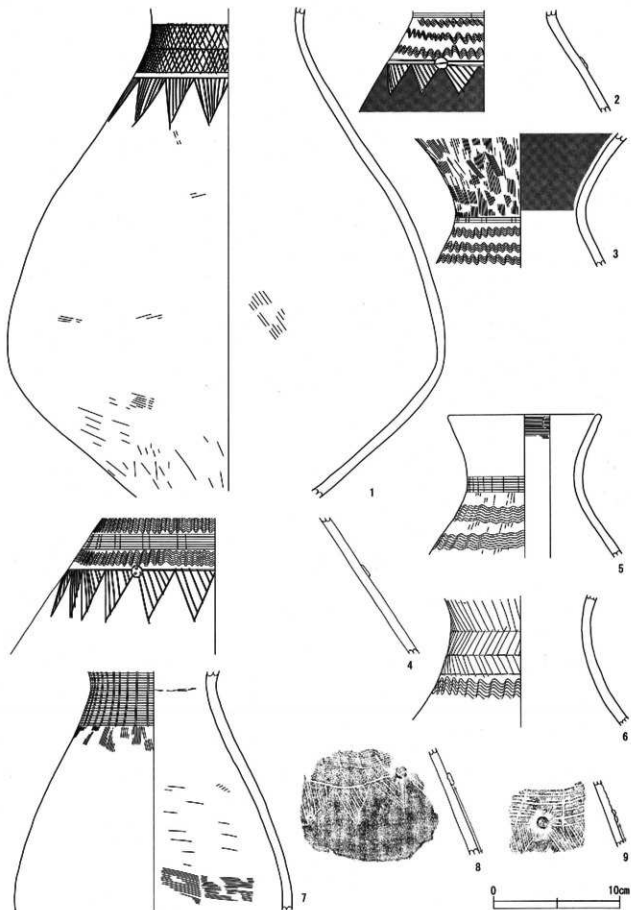
B区4号住居址で2点、SK4で19点、SK8で5点、総数で26点出土した。いずれも棺底より出土し円筒形を呈する。色調はブルー系が主体を占めるが、砕けて出土したものは濃グリーン系を呈している。

5. 管玉(第32図5)

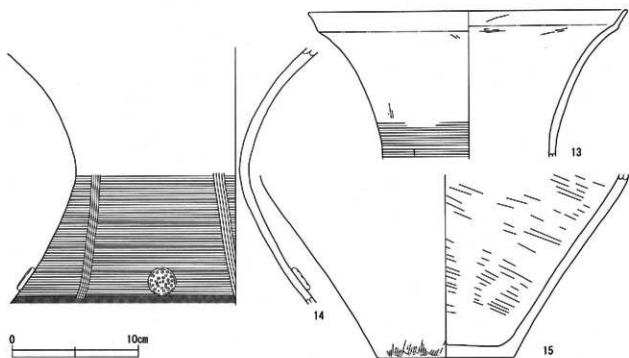
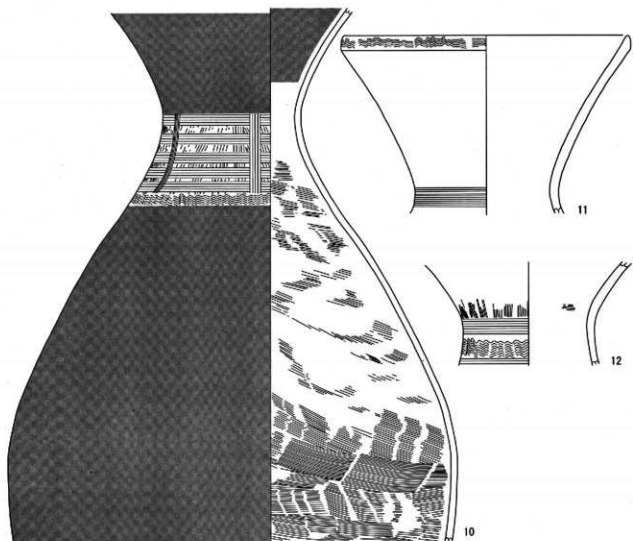
SK8の棺底で2点出土した。鉄石瑛製のものは淡茶褐色を呈し、長さ22.5mm、径2.5mm、孔径1.3mm、碧玉製のものは淡灰緑色を呈し、長さ12.3mm、径3.8mm、孔径1.1~1.4mmを測る。いずれも細形管玉である。

6. 勾玉(第32図6)

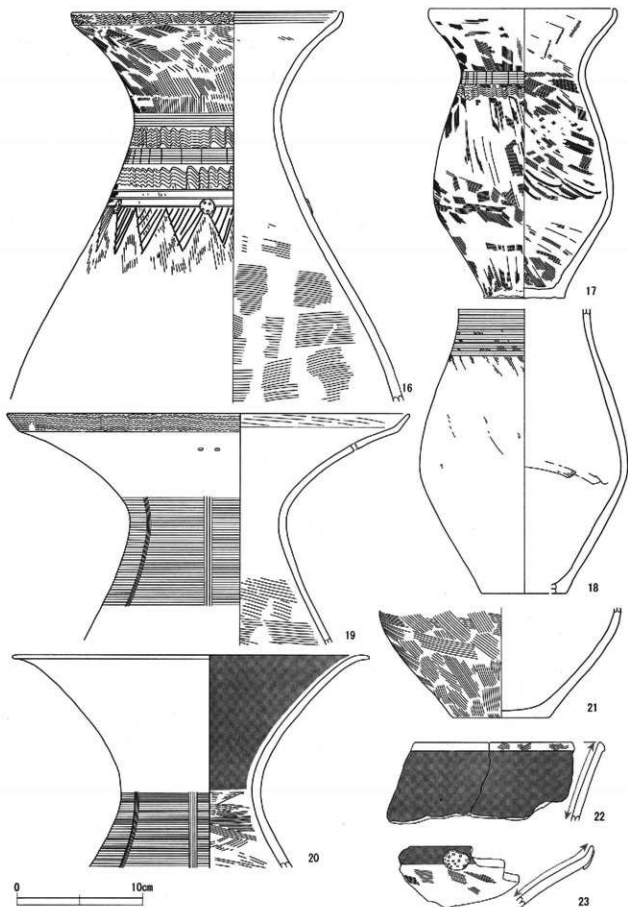
B区SK9坑底より出土した。全長16mmほどの小型品で、丸みはなく板状を呈する。一部を欠く。L字型に湾曲し、3~1mmのロート状の孔を持つ。翡翠製で、明緑色を呈する。



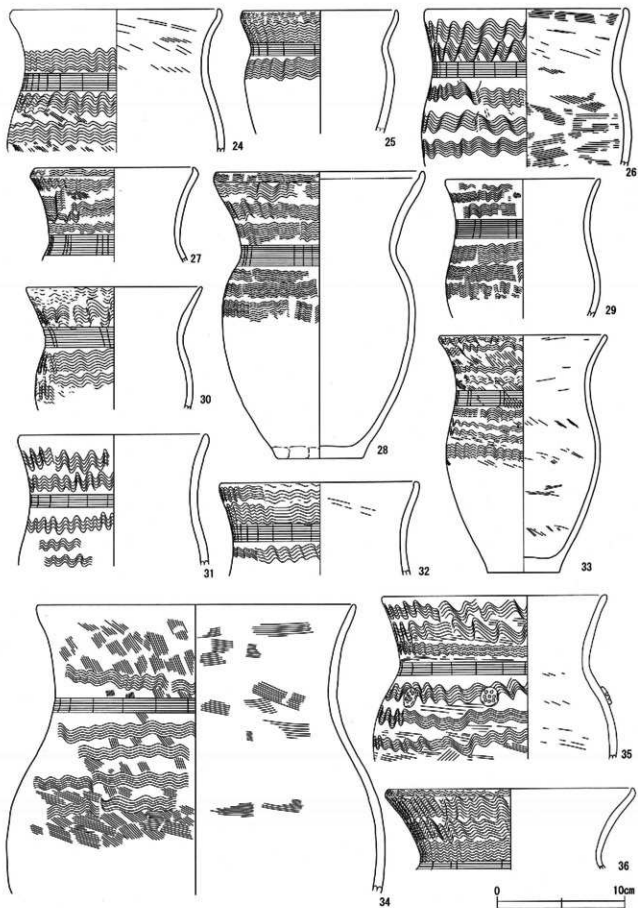
第26図 弥生時代の土器-1



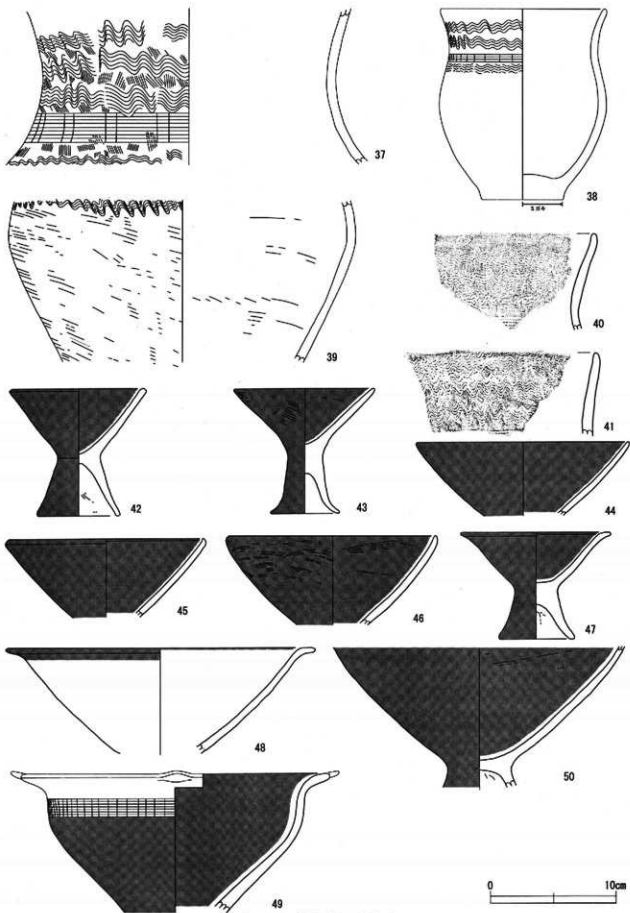
第27圖 弥生時代の土器-2



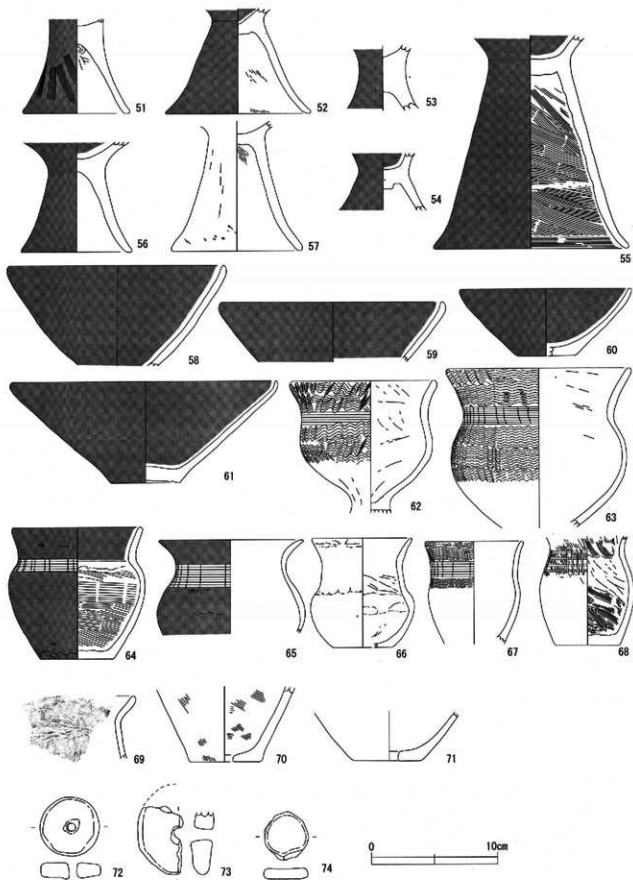
第 28 図 弥生時代の土器 -3



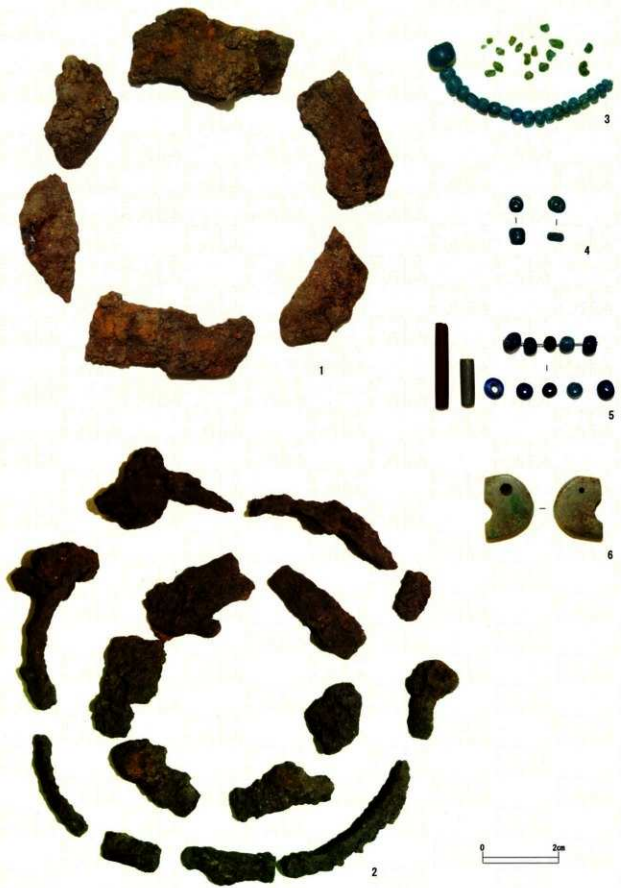
第29図 弥生時代の土器-4



第30図 弥生時代の土器-5



第31図 弥生時代の土器-6・土製品



第32図 鉄劍・管玉・勾玉

第5章 平安時代

第1節 遺物

土器 (第33図～第37図)

出土土器には、黒色土器坏、土師器坏・甕、須恵器坏・壺・蓋がある。なかでも坏、甕の出土量が圧倒的に多い。図示できるものは遺構内から出土のものがほとんどで、遺構外のもののごくわずかである。

坏は、黒色土器坏が主体で、土師器坏は量的に少ない。外面がナデ整形、底部の整形は、回転糸切りにより切り離したもの(1、5～7、15～17、20)、ナデ整形後ヘラ削り整形したもの(2、4、14、22)、回転台を利用し底部をヘラ削り整形後に体部にかけてヘラ削り整形したもの(18、19、23)がある。体部はいずれも緩やかなカーブを描いて内湾する。61は底部がヘラ削りされ、わずかに平底になっている。

土師器甕(42～73)は口径が20cm前後のものが多く、「く」の字形に屈曲する口辺部をもつものが主体であるが、口縁部端が引き出され内反するもの(49)、口縁部が内屈する越後型甕のもの(64)もある。外面整形がヘラ削り、内面がカキ目調整されるものが多い。

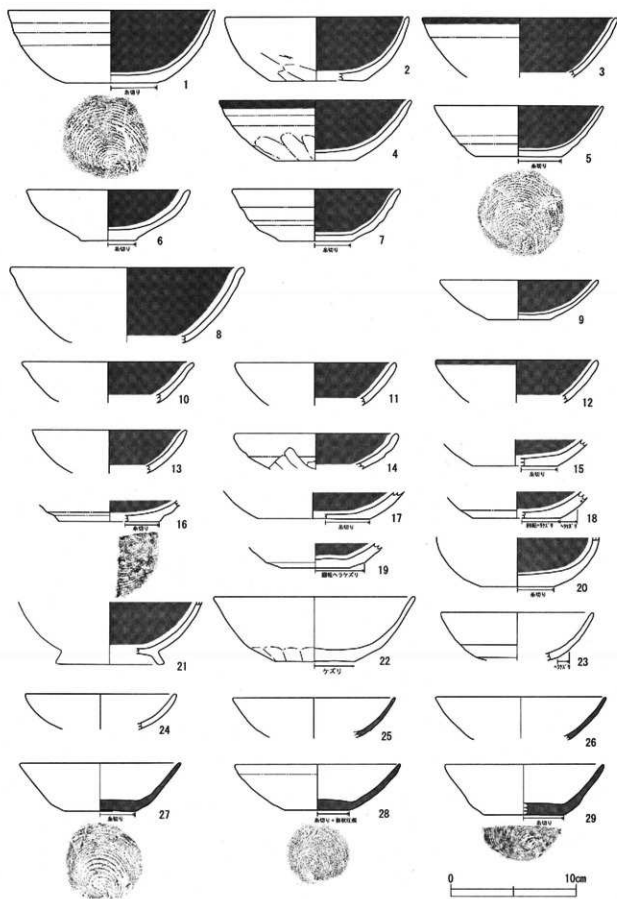
小型甕(74～77)は口辺部が単純に外反するもの(75、76)、強い横ナデにより口縁部が2段になるもの(74、77)、がある。底部に糸切り痕を残す。

須恵器坏(25～39)は口径が12cm前後のものが多く、薄いグレー色を呈する。底部に糸切り痕を残すが、切り離し後にナデ整形をしたもの(35)もある。

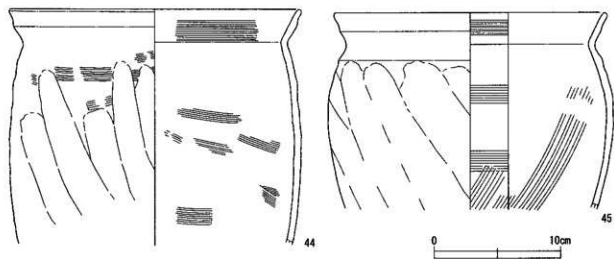
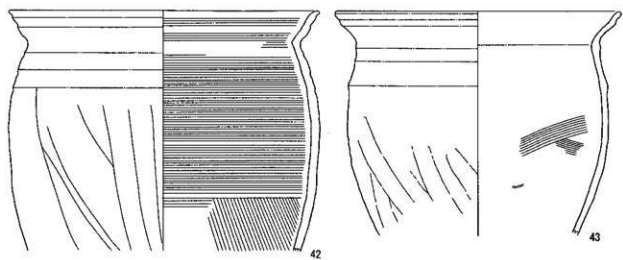
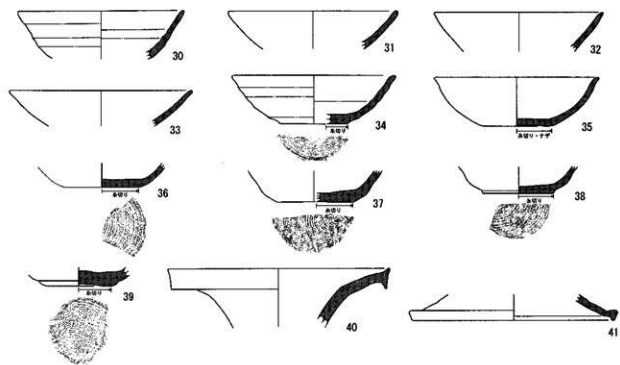
須恵器壺(40)で図示できるものはこの1点である。口辺部のみのため全体形は不明。回転ナデ整形がされる。

41は須恵器坏蓋と思われれるが、坏は出土していない。ナデ整形される。

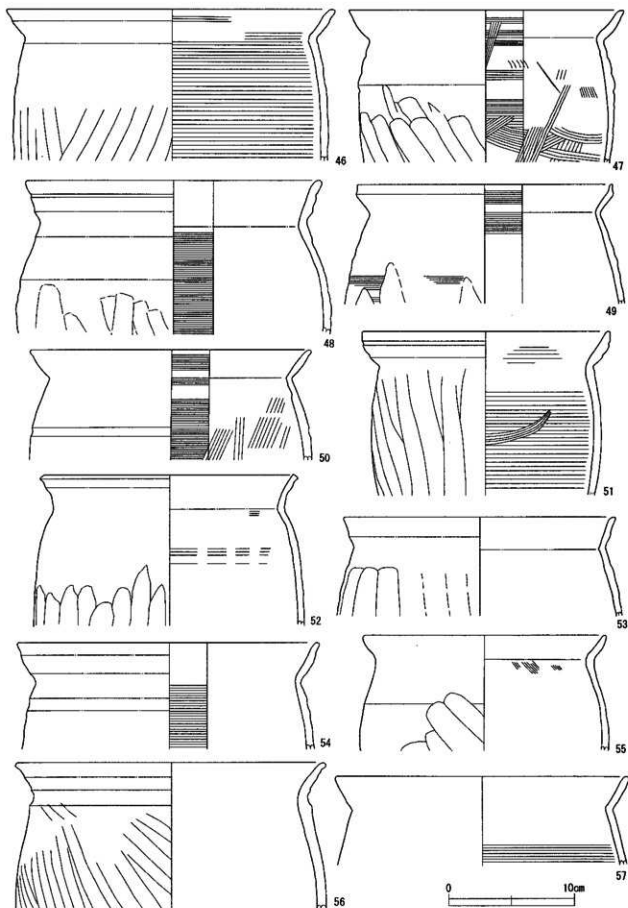
78は埴形の土器である。やや丸みを帯び、強い横ナデにより数条の稜をもつ。79は小片のため器形は不明。



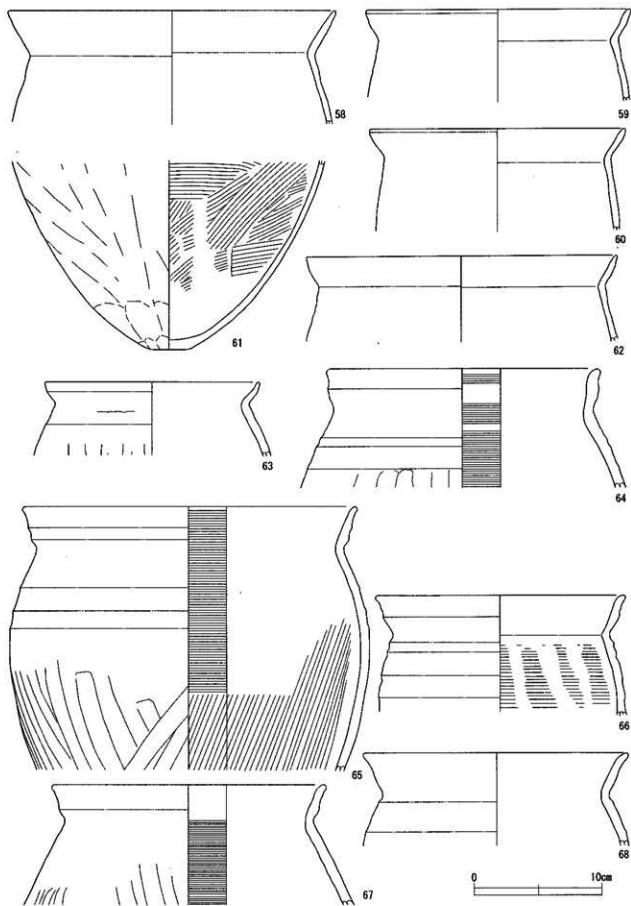
第 33 図 平安時代の土器 -1



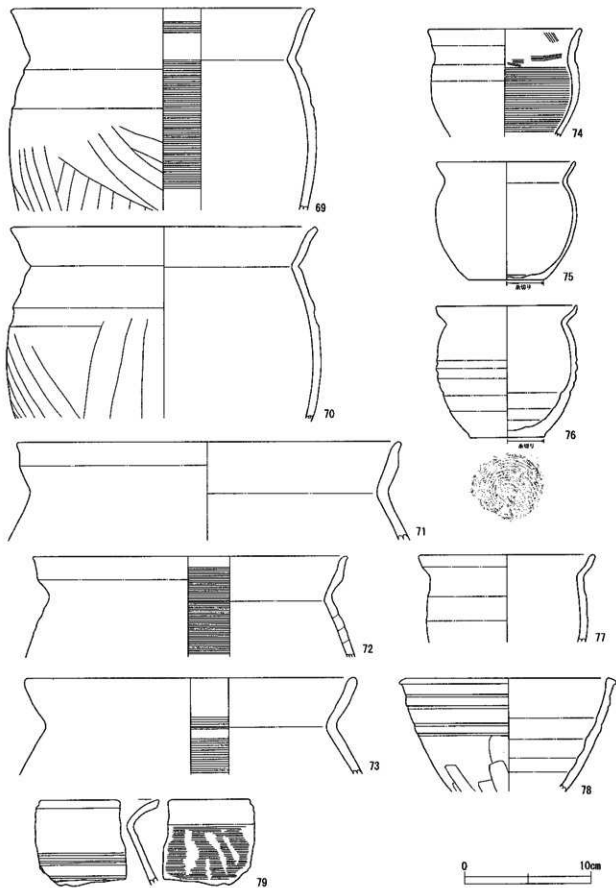
第34図 平安時代の土器-2



第35図 平安時代の土器-3



第 36 図 平安時代の土器-4



第 37 図 平安時代の土器-5

第6章 その他の遺物

ここに掲載した土器は、部位も一部であり、銭貨・石器・石製品とともに時代を特定することが困難なため、その他の遺物としてこの章に一括した。

1. 土器 (第38図 1~11)

1は注口が管状を呈する注口土器である。明茶色を呈し、内面が丁寧なヘラ磨きがされ堅かな土器である。2は口辺部が大きく内反する黒色土器坏と思われる。黒磨きは口辺部外面まで及ぶ。3は口縁部端に強いナデがみられる。4は器外面が叩き整形される重量感のある土器である。5は底部がヘラ成形される須恵器甕と思われる。6は内面がすり鉢として再利用される。7、8は色調が明灰色を呈する、所謂須恵系土器器坏である。7は底部に糸切り痕を残す。9は内外面とも黒色を呈する黒色土器坏である。10はヘラ削りによる整形がされる大型甕である。11は整形時に使用したのであろう布痕を口縁部外面に残す。

2. 銭貨 (第38図 12)

鉄製品に隣接するピット内から出土。保存状態は悪い。字体はなんとか「至大通宝」と読むことができる。径22mmを測る。

3. 石器・石製品 (第39図)

1は短冊形、2~4は撥形を呈する打製石斧である。1~3、4は砂岩を素材としている。1は第2次加工により剥離した面をそのまま刃部にし、側縁を細部加工している。2、3は側縁が細部加工され、2は一部に素材面を残す。4は片面に素材を残し、刃部、側縁とも細部加工される。

5は砂岩を素材とする石匙である。両面に大きな剥離を加え、刃部は両面より細部に加工される。

石器

(単位: mm)

6は周縁が細部加工される砂岩製のスクレーパーと思われる。

7は自然石を利用した敲打石と思われる。断面が三角形を呈し中央が窪み握りやすい。

使用痕が手に握る部分以外にみられる。

8は川原石を利用した凹石である。丸みを帯びた三角形を呈し、ちょうどに掌に載る大きさと持ちやすい。中央の凹はロート状を呈する。深さ10mm程で浅い。

番号	長さ	幅		厚さ	重さ (g)	検出地区(地点)
		上部	下部			
1	151	55	56	12	134	B区B2グリット
2	115	36	49	16	95	B区C7グリット
3	83	46	57	18	87	B区C7グリット
4	75	47	36	17	69	B区C6グリット
5	59			11	59	B区C6グリット
6	56			10	28	A区A8グリット
7	111	35	60	35	362	B区1号住居址覆土
8	75			35	225	C区B5グリット
9	102	36	58	10	93	C区C3グリット
10	86	27	45		128	C区6号住居址
11	23			3.5	1	A区A9グリット

9は安山岩を4は第一次加工により剥離した面をそのまま利用し、刃部のみ第2次加工を施している。

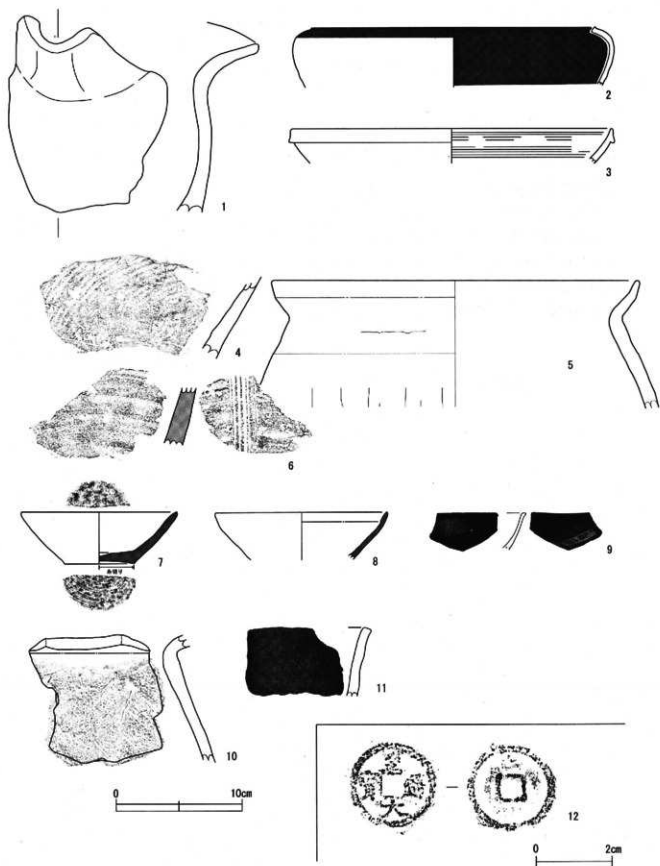
10は住居址内より出土した砥石である。撥形を呈し、両面とも抉り取られたようなカーブ

を描き、きわめて平滑である。幅広面底にはヒモ状のものを通して包むための十字状の刻痕がある。手持ち砥石として使用されたのであろう。

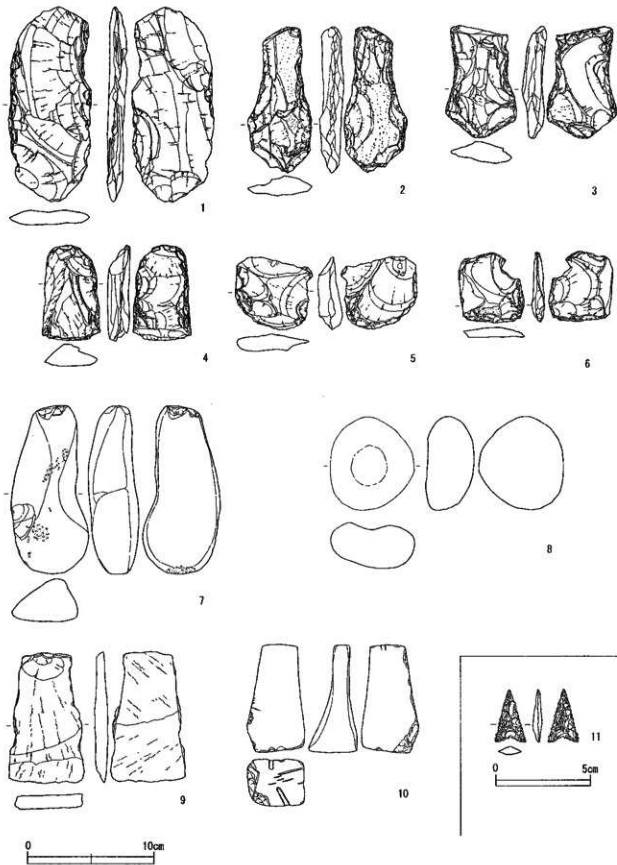
石鐮の素材となるチャートは何点か出土しているが、製品はこの1点(11)のみである。凹部無茎鐮で、加工状態は優良で側縁が鋸状に剥離されている。

参考文献

- 飯山市教育委員会 『上野遺跡Ⅳ』 1994
木島平村教育委員会 『蟹沢遺跡』 1994
木島平村教育委員会 『根塚遺跡』 2000
中野市誌編集委員会 『中野市誌(自然編)』 1981
中野市教育委員会刊行 『長野県中野市遺跡詳細分布図』 2006
中野市歴史民俗資料館 『栗林遺跡と千曲川水系の弥生土器展示図録』 2005



第 38 図 その他の遺物



第39図 石器・石製品

第3編 吉田宮脇遺跡の調査

第1次調査

第1節 遺構

1 遺構の調査

本遺跡は扇状地上に形成されていることから、複数の河川堆積層及び河床が予測された。そのため、試掘ピットを設け、土層観察を行い、遺物包含層や遺構確認の可能な層序を予め予測し、重機による掘削と手堀りによる掘削、遺構検出を交互に行うことにした。

結果、第5図に示したような層序が確認され、都合3面を遺構検出面とした。遺構検出面以外の層においては極めて遺物の出土量が少なかった。出土遺物には弥生時代から中世のものも確認されている。

遺構検出面としたⅠからⅢ面は平安時代以降のものであると考えられる。

2 第Ⅰ検出面の遺構

第Ⅰ検出面においては土坑及び溝状の遺構、及び柱穴状の遺構が検出されているが数は少ない。

(1) 土坑 (第41・42図)

いずれも、円ないし不正円形状の平面形で皿状の断面をもつ。覆土も浅く、遺物の出土も見られなかった。

(2) 井戸状遺構 (第41図)

直径約3mの円形をなし、深さ約80cmほどある。断面は底部に近づくに従い、直径が小さくなっている。覆土はいずれも黒色を基調とした粘土質の土壌であった。

(3) 溝状遺構 (第43図・44図)

幅約3mの不整形な平面形をもつ溝と幅約40cmの細い溝が確認されている。いずれも、浅く、その性格はあきらかではない。

3 第Ⅱ検出面の遺構

(1) 竪穴住居址 (第47図)

平面形は約4m×3mの長方形であり、検出面からの深さは約10cm前後であった。北側の壁、中央に竈の痕跡が確認された。遺物は覆土内に散在していた。いずれも、小破片であった。

(2) 土坑

SK6 (第48図)

直径約3mの不正円形をなし、深さ約40cmを測る。壁の立ち上がりも明確で、土坑底面はほぼ平坦である。

SK3 (第48図)

長軸約192cm、短軸約136cmの隅丸長方形であり、深さ約40cmである。土坑底面は凹凸が認められ、河原石も認められた。

SK12 (第48図)

直径約3m60cmの不正円形であると思われるが、土坑の約半分は調査区外に伸びている。

深さ約 56 cm あり、土坑底面は約 100 cm と小さくなっている。

SK14 (第 48 図)

調査区の壁際で検出されおり、全形は不明である。おそらく、直径約 150 cm の不整形円形になるものと思われ、深さは約 28 cm ある。

SK16 (第 49 図)

調査区境界の壁際で検出されたため、全形は不明である。おそらく、隅丸の長方形であろうと推測される。深さ約 30 cm ある。

SK9 (第 49 図)

直径約 120 cm の不整形円形で、深さは約 28 cm ある。底面は平坦ではなく、断面ボール状をしている。

SK13 (第 49 図)

直径約 88 cm の不整形円形であり、深さは約 24 cm ある。

SK15 (第 49 図)

長軸約 108 cm、短軸約 60 cm の長円形であり、深さ約 20 cm である。

SK2 (第 49 図)

直径約 100 cm の不整形円形であり、深さは約 28 cm である。土坑底面には河原石があり、壁の立ち上がり方も不均等である。

SK10 (第 49 図)

直径約 56 cm の不整形円形であり、深さは約 30 cm である。毒底面は平坦ではない。

SK7 (第 49 図)

直径約 88 cm の円形で 深さ約 32 cm ある。土坑底面は丸く窪み、断面ボール状をしている。

SK6 (第 50 図)

長軸約 120 cm、短軸約 86 cm の長円形で、深さ約 48 cm である。土坑底の直径は約 60 cm と小さく、浅い凹状を呈している。

SK5 (第 50 図)

長軸約 108 cm、短軸 72 cm の長円形で、深さは約 10 cm と浅く、壁の立ち上がりも緩やかである。

SK9 (第 50 図)

直径約 72 cm の円形で、深さは約 30 cm ある。壁の立ち上がりは垂直にちかい。

SK8 (第 50 図)

長軸約 30 cm、短軸約 30 cm の長円形で、深さ約 28 cm ある。土坑底面には若干の凹凸が見られ、底面からの壁の立ち上がりは明確な屈曲点をもたない。

SK10 (第 50 図)

長軸約 60 cm、短軸約 52 cm の長円形で、深さは約 26 cm である。土坑底面は平坦で、壁の立ち上がりも明確である。

SK7 (第 50 図)

長軸約 72 cm、短軸約 48 cm の長円形で、土坑底面に凹凸が若干見られ、底面からの壁の立ち上がりは緩やかである。

SX2 (第50図)

攪乱があり、全形は明らかでないが、コーナーが認められ、方形ないし、長方形を呈する平面プランをもつものであろう。深さは約28cmある。

SX1 (第50図)

長軸約240cm、短軸約150cmの不整形円で、深さは約40cmある。土坑底面が二段の平坦面をもつことから、二つの土坑が切り合ったものではないかと推測される。

(3) その他の遺構

溝状遺構及び柱穴状のピットが検出されている。いずれも、その配置に規則性がなく、その性格等は不明といわざるをえない。時期的には古代～中世のものと考えられる。

第2次調査

第1章 弥生時代

第1節 遺構

(1) SK2 (第62図)

2.5m×1mのひょうたん形を呈する。深さは30cm程ある。土坑内より弥生後期土器片数点が出土したが、いずれも小片である。坑外より焼土がかたまつて検出されたが、土坑と直接関係するものなのか明確でない。坑内のP23、P24は周囲の柱穴と関係するものと考えたほうがよいであろう。

第2章 平安時代

第1節 遺構

検出された遺構は、住居址(SB)2棟、掘立柱建物址1棟、土坑(SK)1基がある。本調査区は、南北両端部が砂礫層の、いわゆる小河川の氾濫場所であることから、黄色土層—茶褐色土層—礫を含む黒色土層—砂礫層と複雑な層序を呈している。遺構の検出面は茶褐色土層に黄色土の掘り込みとなっており、遺物はいずれも茶褐色土層から出土している。

(1) 1号住居址 (第61図)

検出した部分は方形プランを呈するが、2号住居址と切り合っているためその規模は不明。茶褐色土層を掘り込んでいるが、下層が礫を含む黒色土層のため床面、北側の周壁が不明瞭である。遺物は小片であるが、土器器片が出土している。

(2) 2号住居址 (第61図)

住居址の東側一部が破壊されている。黒色土層は見られない。1号住居址の不明な周壁方向に砂礫がみられ、住居址の床面まで小河川により削られたことがわかる。周壁は1号住居址より明瞭である。周壁に接するP26・P25が関係する柱穴と考えられるが、P6・P7は整合性に欠ける。南北4.2mの方形プランを呈するが、東西の規模は不明。遺構内より土器器片が出土している。

(3) 掘立柱建物址 (第62図)

多くの柱穴のうちP11～P15、P17、P18、P21による1棟が推定される。東北端の柱穴を欠く。ただ東北端部に検出された平坦な河原石はなんだろう。礎石として使えそうな礫で

ある。建物址の年代を特定することが難しいが、2号住居址に隣接することから同時代のものと推定される。南北2.2m、東西3.7mの方形プランを呈し、柱間寸法は東西1.8m～2.0m、南北1.0～1.2mで、やや不揃いである。

(4) SK1 (第62図)

調査区南東端のB14～C14で検出。長軸は南北方向で1.4m×0.9mの方形プランを呈する。深さは25cm程ある。遺構内から炭化物が検出されたが、遺物の出土はない。隣接するC15に検出された柱状の炭化物と柱穴が建物址の一部の可能性もあり、付随するものかもしれない。

第2節 遺物 (第63図～第68図)

弥生時代、古代、中世に属する遺物が検出されているが、いずれも遺構に伴うものではなく、その数も少ない。

1 弥生時代の遺物 (63図)

1は壺形土器の口縁部であり、内外面は赤色塗彩され、端部がつままれたように小さく立ち上がっている。吉田式土器の後半に位置するであろう。2は鉢形土器の底部、内外面とも赤色塗彩される。第67図129～138、140～148は129、130、141を除いて、壺形土器の破片である。横走する櫛描波状文は上下の振幅が小さく、131例のように、やや内側に傾くように立ち上がる口縁端部から、吉田期の後半のものと考えられる。

2 古代の遺物

(1) 須恵器

3～30は須恵器杯。高台を持つものと持たないものの二者がある。高台を持たないものの底部には糸きり離しの痕跡がそのまま残されている。高台をもつものの杯身はやや箱形である。

149～153は須恵器壺の破片である。

(2) 土師器

33～41は土師器杯。内面黒色処理される34～37、されない38～41がある。40は高台を持つ。いずれも回転台成形される。

42～54は土師器壺。いずれも長胴形の壺であり、回転台にて成形される。48や50から、胴部過半部は縦方向のヘラ削りによる成形が考えられる。また、42、47、48の内面には横方向のハケ成形痕(カキ目)が観察できる。

印象的にはそれほど大きな時間差のない資料群だと思えるが、口縁部の形態などに、多様性が認められる。これらの多様性をどのように考えるのか、今後の検討課題だといえる。

3 中世の遺物

(1) 土師質皿

56～72は土師質小皿。口径の小さなものから、大きなものまでであるが、底部には糸切り離し痕がそのまま残る。北信地方における中世土師質皿の発見例は多くなく、その編年の確立が望まれるが、管見によれば、杯身の立ち上がりが短いものから、長いものへと変化するようであり、本遺跡出土例は前者に相当し、14世紀代に編年することができる可能性がある。

(2) 焼き締め陶器

73～87 珠洲焼のすり鉢である。いずれも破片であり、断定できないが、それぞれ別個体のものである。一遺跡の出土量で比較すれば、その数が多いといえようか。

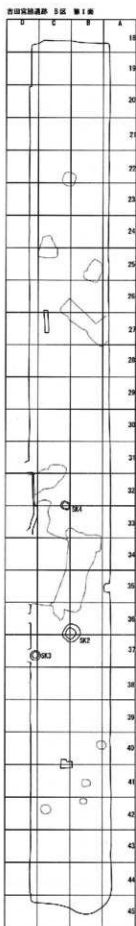
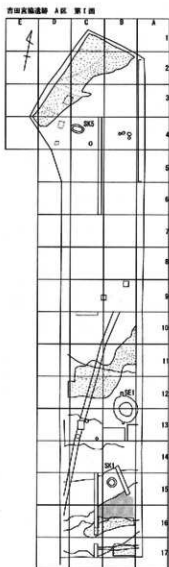
154～204 は珠洲焼の壺の破片である。

(3) 陶器

91～124 は陶器。いずれも小破片であるが、天目茶碗や青磁が認められる。124 はやや黄味を帯びた白色の釉が認められる。肌は細粒子によってザラザラとした感触である。

(4) その他の遺物

また、第 66 図 125～128 に図示したものは石製品であり、125 は砥石、126、127 は硯の破片である。128 は時期が不詳であるが敲打痕をもつ。

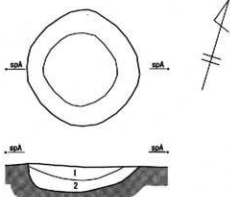


砂層 礫層

0 4m

第40図
第1面 グリットの配置と遺構の位置

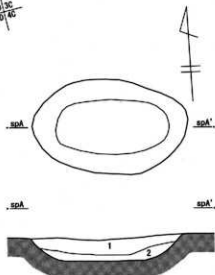
14C/14B
15C/15B



1. 黒褐色土 (7.5YR3/1) 粘子細・粘性ややあり・締り強 炭化物、
褐色土、礫を含む。φ10～20cm 大の礫を4～5個含む。シルト質。
2. 黒褐色土 (7.5YR3/1) 粘子細・粘性ややあり・締り強 炭化物、
礫を含む。褐色土を多く含む。

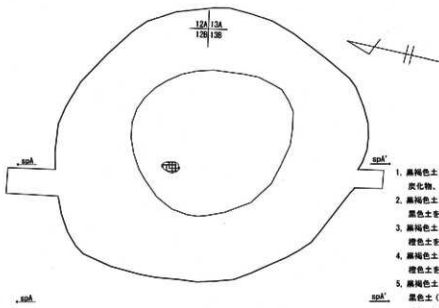
SK1

3B/3C
4D/4C

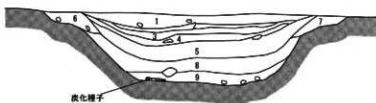


1. 黒灰色土 (7.5YR4/1) 粘子細・粘性強・締りやや強 φ5～20cm 大の礫を含む。
黄褐色土をわずかに含む。
2. 黒灰色土 (7.5YR4/1) 粘子細・粘性強・締りやや強 黄褐色土を1より多く含む。
底面に鉄分が浸透している。

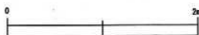
SK5



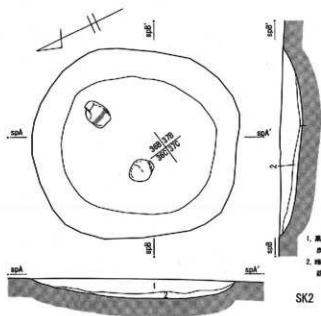
1. 黒褐色土 (5YR3/1) 粘子細・粘性ややあり・締り強
炭化物、褐色土をわずかに含む。φ3～10cm の礫を含む。
2. 黒褐色土 (5YR3/1) 粘子細・粘性ややあり・締り強
黒色土を少量含む。φ3～10cm の礫を含む。
3. 黒褐色土 (5YR3/1) 粘子細・粘性ややあり・締りやや強
褐色土を帯状に含む。1より細かい色調。φ2～10cm の礫を含む。
4. 黒褐色土 (5YR3/1) 粘子細・粘性ややあり・締りやや強
褐色土をわずかに含む。φ2～10cm の礫を含む。
5. 黒褐色土 (5YR3/1) 粘子細・粘性ややあり・締りやや強
黒色土 (腐植土か)、褐色土 (細かい砂を含む) を互層に含む。
φ3～10cm の礫を含む。
6. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘子細・粘性ややあり・締り強
褐色土を中量含む。φ3～10cm の礫を含む。
7. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘子細・粘性ややあり・締り強
褐色土を中量含む。φ3～10cm の礫を含む。
8. 黒褐色土 (5YR2/1) 粘子細・粘性強・締りやや強
褐色土、黒色土を少量含む。φ3～10cm の礫を含む。
9. にぶい礫 (7.5YR5/3) 粘子細・粘性強・締りやや強
φ5～20cm 大の礫を含む。



SE1

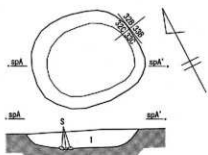


第41図 A区第I面 土坑・井戸



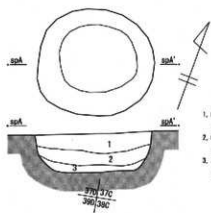
SK2

1. 黒褐色土 (1093/2) 粘土層・粘性中あり・細り強炭化物粒子が目立ち、赤褐色土粒子をまばらに含む。
2. 暗褐色土 (1093/2) 粘土層・粘性中あり・細り強炭化物粒子が目立ち、赤褐色土粒子をまばらに含む。



SK4

1. 褐色土 (1094/4) 粘土層・粘性弱・細り強炭化物粒子をまばらに含む。

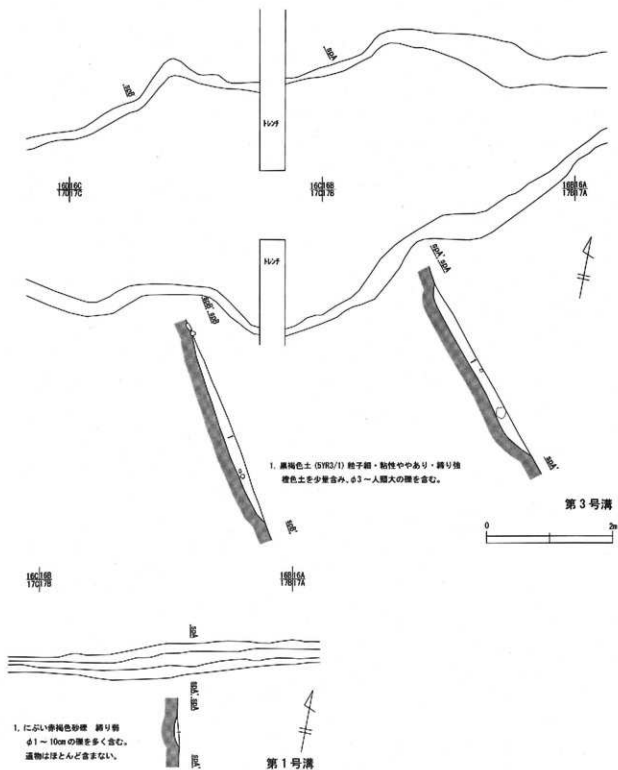


SK3

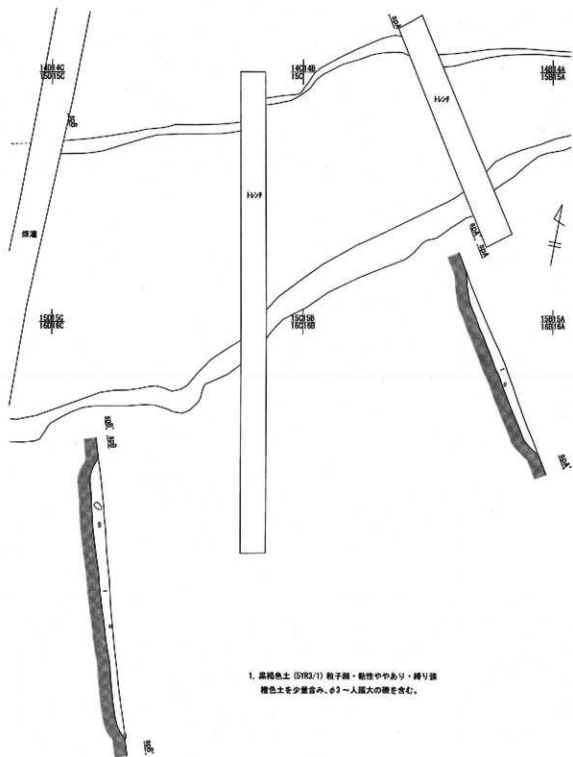
1. 暗褐色土 (1093/4) 粘土層・粘性中あり・細り強炭化物粒子をまばらに含む。
2. 暗褐色土 (1093/2) 粘土層・粘性あり・細り強炭化物粒子が目立ち、赤褐色土粒子をまばらに含む。
3. 黒褐色土 (1093/2) 粘土層・粘性あり・細り強炭化物粒子が目立ち、赤褐色土粒子をまばらに含む。



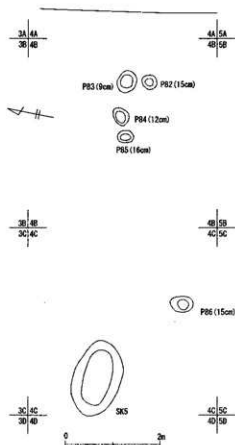
第42図 B区第1面 土坑



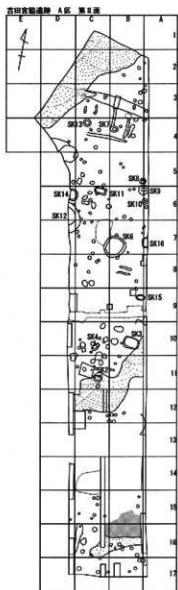
第43図 A区第1面 第1号・第3号溝



第44図 A区第1面 第2号溝



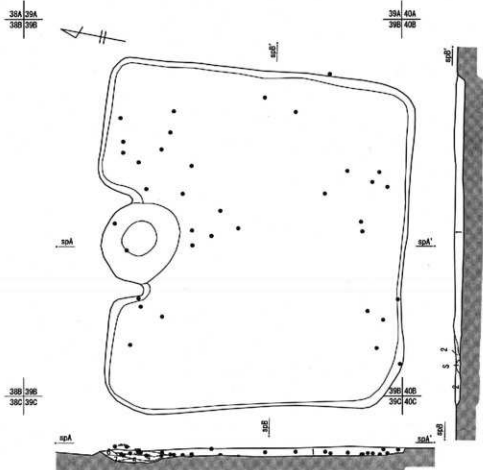
第45图 A区第1面 柱穴



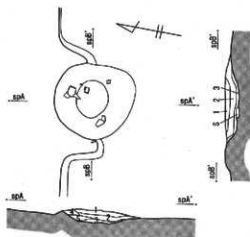
砂層 壊層

0 4m

第46図
第II面 グリットの配置と遺構の位置



1. 黒褐色土 (10YR3/3) 粒子細・粘性ややあり・締りあり 黒褐色土粒子、炭化物が多量に混入。焼土粒子まばらに含む。
2. 灰黒褐色土 (10YR4/2) 粒子細・粘性ややあり・締りあり 黒褐色土粒子、炭化物が多量に混入。焼土粒子はみられない。
3. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粒子細・粘性あり・締りあり 焼土粒子多く含む。炭化物粒子目立って含む。
4. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粒子細・粘性あり・締り強 焼土粒子まばら。炭化物粒子目立って含む。
5. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粒子細・粘性あり・締り強 焼土粒子わずか。炭化物粒子まばらに含む。黒色土粒子目立って含む。
6. 暗赤褐色土 (5YR3/2) 粒子細・粘性ややあり・締りあり 焼土を多量に含む。炭化物まばらに含む。
7. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粒子細・粘性あり・締り強 炭化物粒子を目立って含む。焼土粒子わずかに含む。



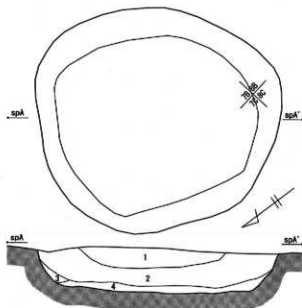
1. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粒子細・粘性あり・締りあり 焼土粒子多く含む。炭化物粒子目立って含む。
2. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粒子細・粘性あり・締り強 焼土粒子まばら。炭化物粒子目立って含む。
3. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粒子細・粘性あり・締り強 焼土粒子わずか。炭化物粒子まばらに含む。黒色土粒子目立って含む。
4. 暗赤褐色土 (5YR3/2) 粒子細・粘性ややあり・締りあり 焼土を多量に含む。炭化物まばらに含む。
5. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粒子細・粘性あり・締り強 炭化物粒子を目立って含む。焼土粒子わずかに含む。

38B 39B
38C 39C

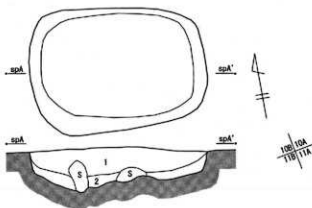
39B 40B
39C 40C



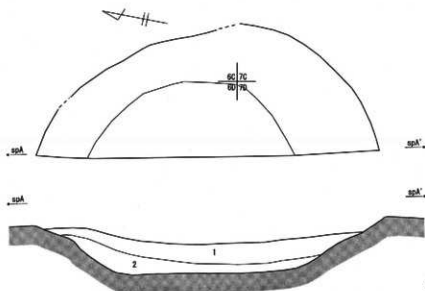
第47図 B区第Ⅱ面 第1号住居址



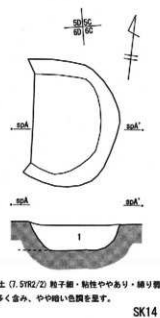
- SK6
1. (7.5YR3/2) 粘子層・粘性弱・締りやや強 炭化物散在する。
 2. (7.5YR3/2) 粘子層・粘性弱・締りやや強 炭化物散在する。
黄褐色土を細かいブロック状に含み、底面に黒色土を帯状に含む。
 3. (7.5YR3/2) 粘子層・粘性弱・締りやや強 黄褐色土を多く含む。
 4. (7.5YR2/2) 粘子層・粘性ややあり・締り弱 1-3よりやや細かい色調を呈す。炭化物をわずかに含む。



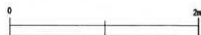
- SK3
1. 黒褐色土 (7.5YR3/1) 粘子層・粘性ややあり・締り強
炭化物・棕色土・煤を含む。シルト質
 2. 黒褐色土 (7.5YR3/1) 粘子層・粘性ややあり・締り強
炭化物・棕色土を多く含む。



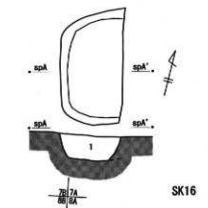
- SK12
1. 褐灰色土 (10YR5/1) 粘子層・粘性ややあり・締りややあり 黄褐色砂を帯状に含み、赤褐色土粒子と炭化物をまばらに含む。
 2. 褐灰色土 (10YR5/1) 粘子層・粘性ややあり・締りややあり 黄褐色砂を帯状に含み、赤褐色土粒子と炭化物をまばらに含む。
上面に薄黄褐色土を帯状に含み、底面に鉄分の沈着がみられる。



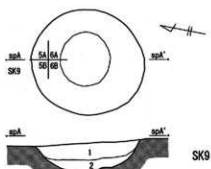
- SK14
1. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 粘子層・粘性ややあり・締り弱
炭化物多く含み、やや細かい色調を呈す。



第48面 A区第Ⅱ面 土坑-1

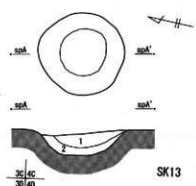


SK16
1. 黒褐色土 (7.5YR3/1) 粘子層・粘性やあり・締り強炭化物を含み、褐色土を多く含む。



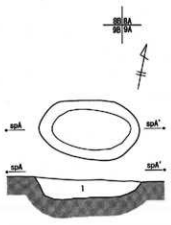
SK9

1. 褐灰色土 (7.5YR4/1) 粘子層・粘性弱・締りやや強炭化物が散在し、硬土をまだらに含む。
2. 褐灰色土 (7.5YR4/1) 粘子層・粘性弱・締りやや強炭化物が散在し、褐色土を多く含む。



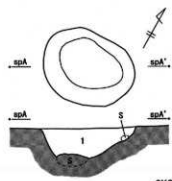
SK13

1. 褐灰色土 (7.5YR4/1) 粘子層・粘性弱・締りやや強炭化物が散在し、褐色土をまだらに含む。
2. 褐灰色土 (7.5YR4/1) 粘子層・粘性弱・締りやや強炭化物が散在し、褐色土をブロック状に含む。



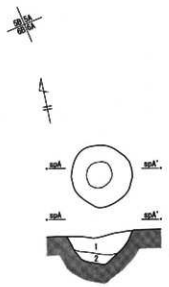
SK15

1. 黒褐色土 (7.5YR3/1) 粘子層・粘性やあり・締り強赤褐色土敷子をまばらに含む、炭化物を多く含む。



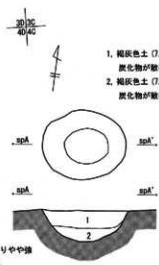
SK2

1. 黒褐色土 (7.5YR3/1) 粘子層・粘性ややあり・締り強硬土を多く含む。

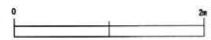


SK10

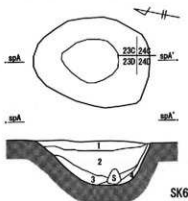
1. 褐灰色土 (7.5YR4/1) 粘子層・粘性弱・締りやや強炭化物が散在し、褐色土をまだらに含む。
2. 褐灰色土 (7.5YR4/1) 粘子層・粘性弱・締りやや強炭化物が散在し、褐色土を多く含む。



SK7

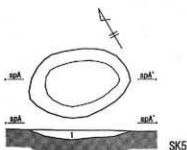


第49図 A区第II面 土坑-2



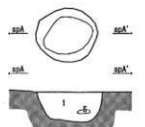
SK6

1. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘り強・粘性ややあり・粘りやや弱
炭化物粒子黄褐色土粒子を多く含む。
2. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘り強・粘性あり・粘りやや弱
炭化物粒子多く含む。隙を含む。
3. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘り強・粘性あり・粘りあり
黄褐色土粒子を多く含む。
4. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘り強・粘性あり・粘りあり
褐色土粒子を多量に含む。



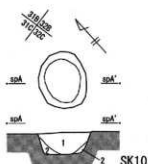
SK5

1. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘り強・粘性弱・粘り強
炭化物粒子。焼土粒子をまばらに含む。



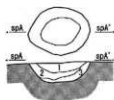
SK9

1. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘り強・粘性弱・粘り強
黒褐色土粒子をまばらに含む。



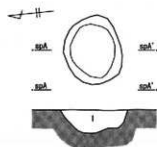
SK10

1. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘り強・粘性弱・粘り強
φ3cm程度の小石が目立って混入。遺物あり。
2. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘り強・粘性ややあり
・粘り強 炭化物粒子をわずかに含む。



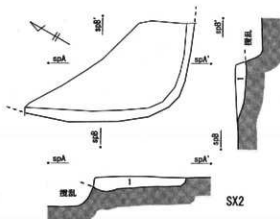
SK7

1. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘り強・粘性ややあり・粘り強
粒土粒子。炭化物まばらに含む。
2. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘り強・粘性ややあり・粘り強
炭化物粒子目立つて含む。
3. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘り強・粘性あり・粘り強
炭化物まばらに含む。



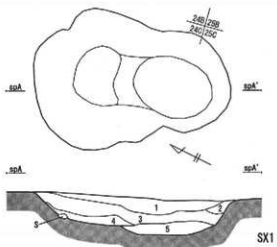
SK8

1. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘り強・粘性ややあり・粘りあり
黒褐色土粒子。焼土粒子をまばらに含む。



SK2

1. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘り強・粘性ややあり・粘り弱
炭化物粒子目立つ。炭分粒子。焼土粒子をまばらに含む。

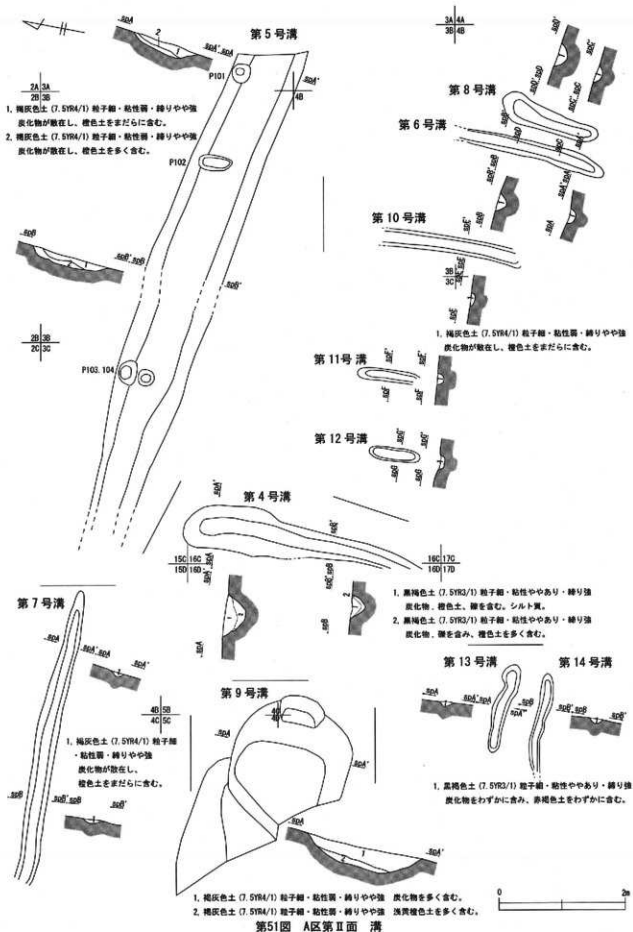


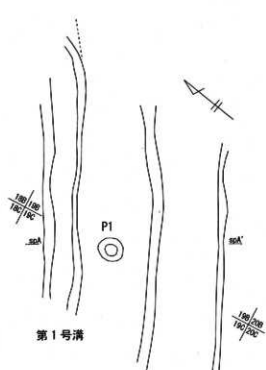
SK11

1. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘り強・粘性あり・粘り弱 炭化物粒子目立つて含む。
2. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘り強・粘性あり・粘り弱 炭化物粒子わずかに含む。
3. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘り強・粘性あり・粘り弱 炭化物粒子まばらに含む。
褐色土粒子目立つ。
4. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘り強・粘性あり・粘り弱 炭化物粒子目立つて含む。
5. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘り強・粘性あり・粘りとも弱 炭化物粒子まばらに含む。
褐色土粒子多く含む。



第50図 B区第II面 土坑



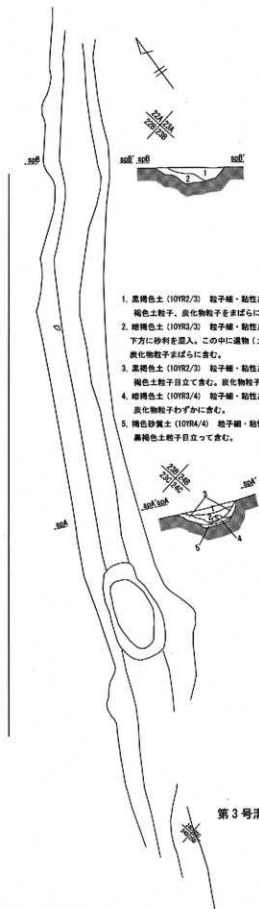


第1号溝

第2号溝



1. 暗褐色砂質土 (10YR2/4) 粘りやや弱・粘性弱・練り弱
わずかに炭化物粒子が混入。
2. 黒褐色土 (7.5YR2/1) 粘り弱・粘性やや弱・練り弱
炭化物粒子をまばらに含む。
3. 暗褐色砂質土 (10YR3/3) 粘りやや弱・粘性弱・練り弱

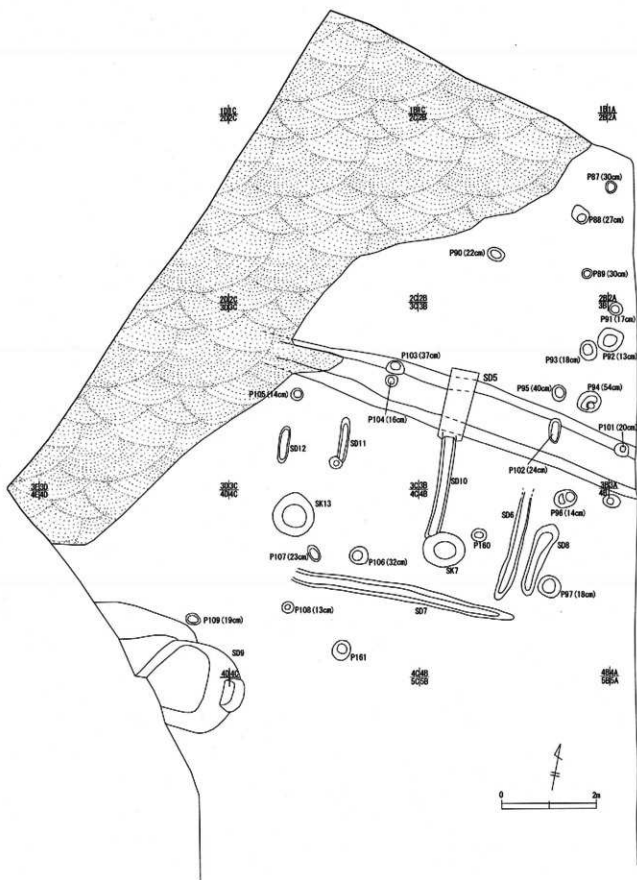


第3号溝

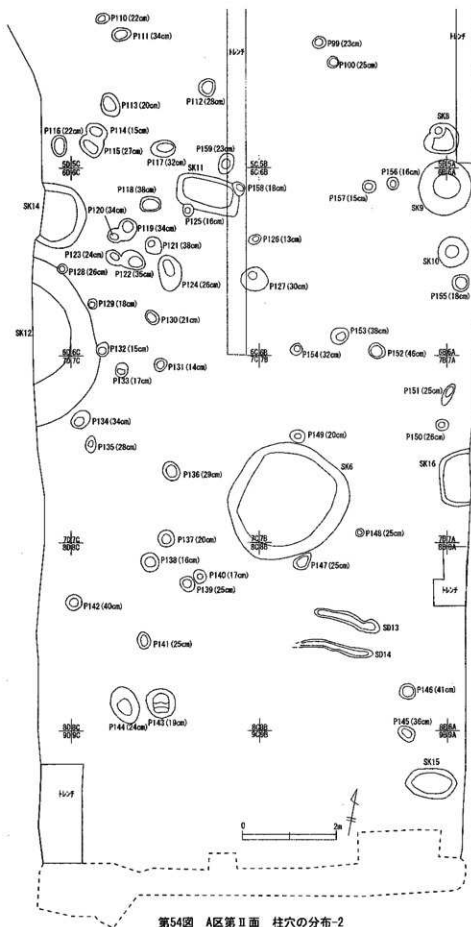
1. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘り弱・粘性あり・練り強
褐色土粒子・炭化物粒子をまばらに含む。
2. 暗褐色土 (10YR2/3) 粘り弱・粘性あり・練りあり
下方に砂利を混入。この中に遺物(土器小破片)を多量に含む。
炭化物粒子をまばらに含む。
3. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘り弱・粘性あり・練り強
褐色土粒子目立って含む。炭化物粒子わずかに含む。
4. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘り弱・粘性あり・練りやや強
炭化物粒子わずかに含む。
5. 褐色砂質土 (10YR4/4) 粘り弱・粘性あり・練り弱
黒褐色土粒子目立って含む。



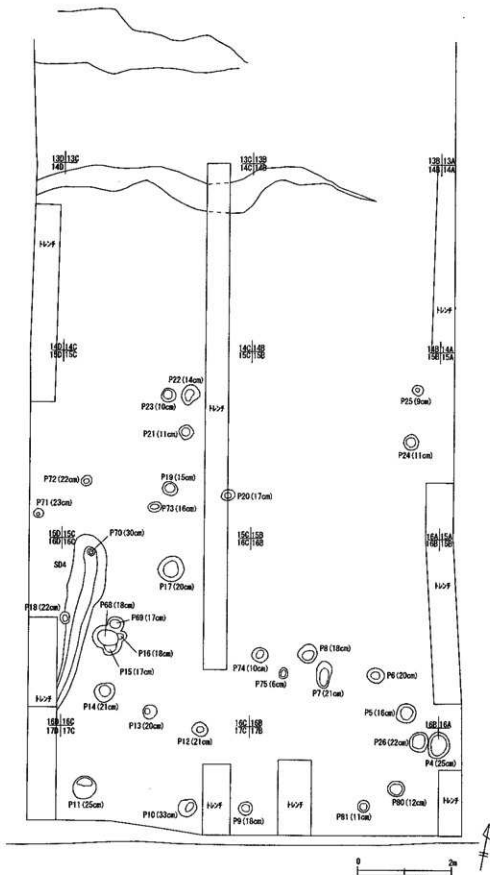
第52図 B区第II面 溝



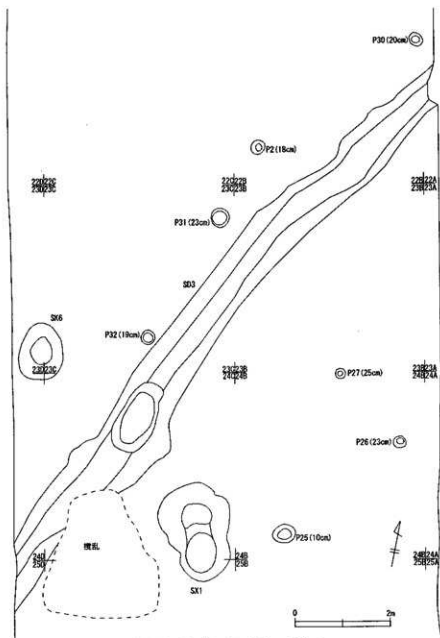
第53図 A区第Ⅱ面 柱穴の分布-1



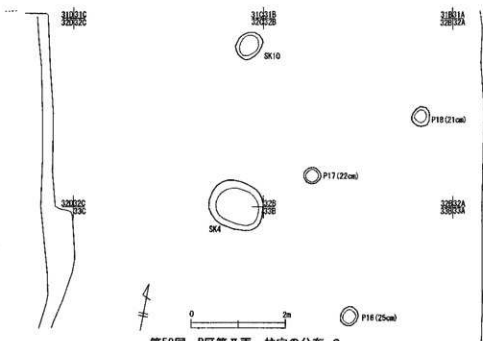
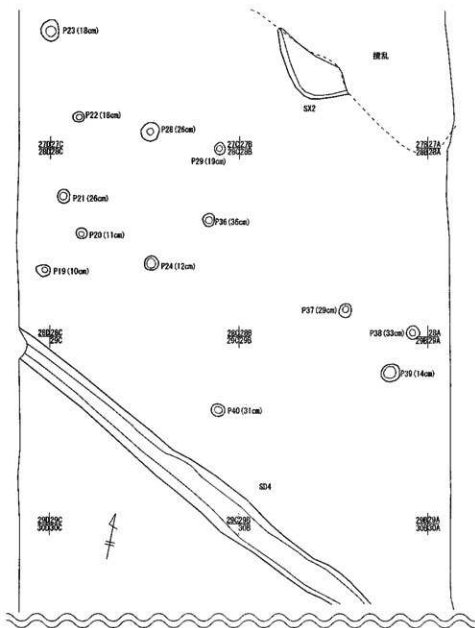
第54図 A区第Ⅱ面 柱穴の分布-2



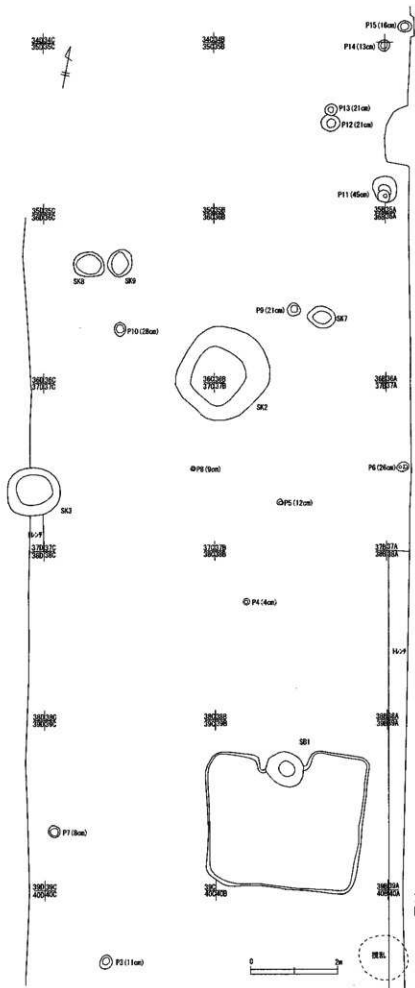
第56図 A区第Ⅱ面 柱穴の分布-4



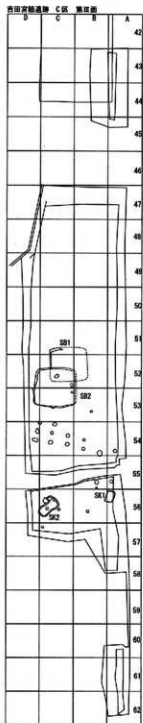
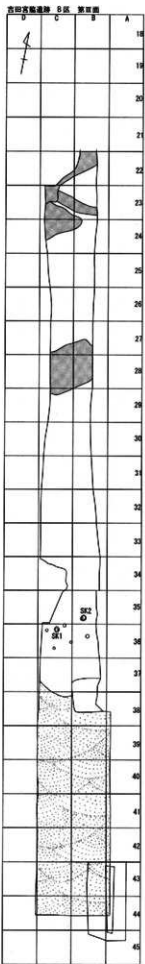
第57図 B区第Ⅱ面 柱穴の分布-1



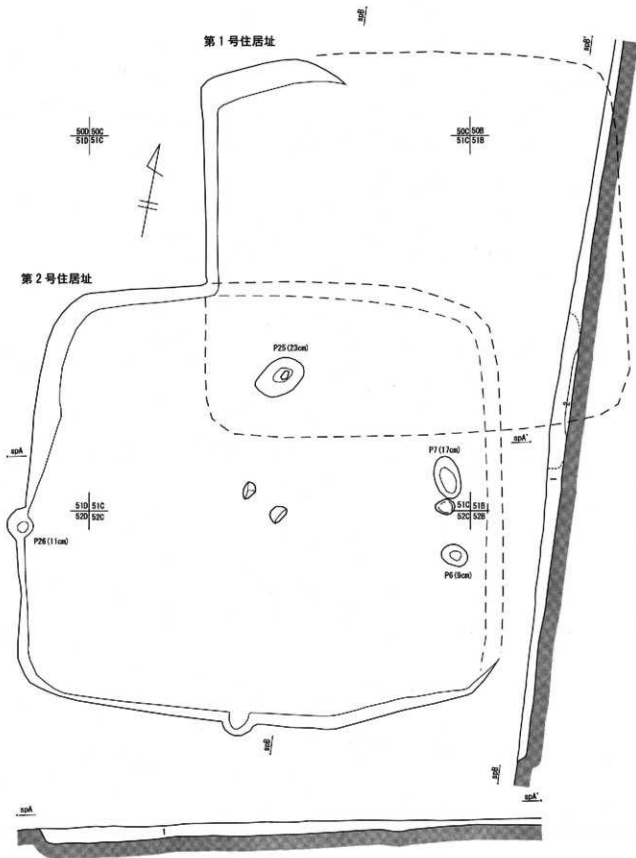
第58図 B区第Ⅱ面 柱穴の分布-2



第59図
B区第Ⅱ面 柱穴の分布-3

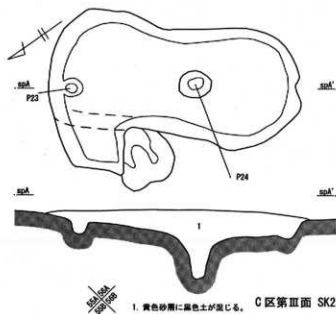


第60図
第Ⅲ面 グリットの配置と遺構の位置

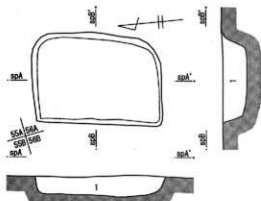


1. 茶褐色土 2. 黄砂に茶褐色土が混じる。

第61図 C区第三面 第1号・第2号住居址

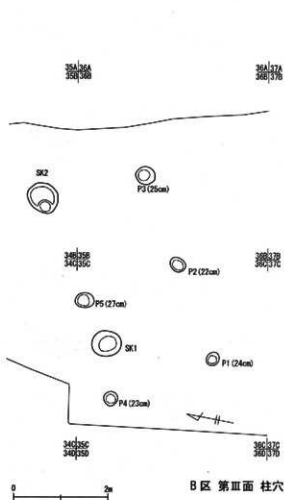


1. 黄色砂層に黒色土が混じる。 C区第三面 SK2

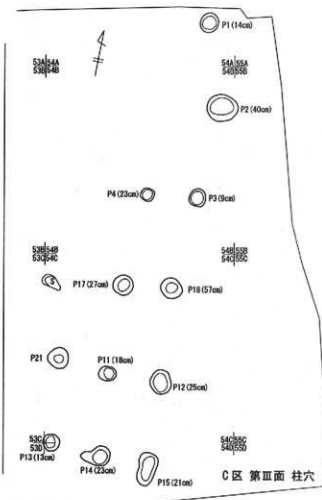


1. 砂層に黒色土と炭化物がわずかに混じる。

C区第三面 SK1

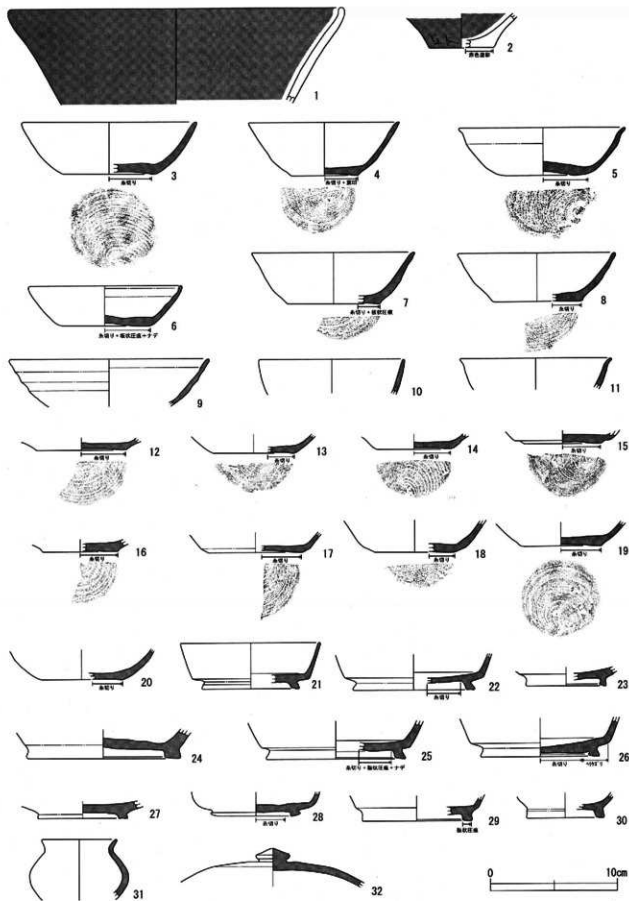


B区 第三面 柱穴

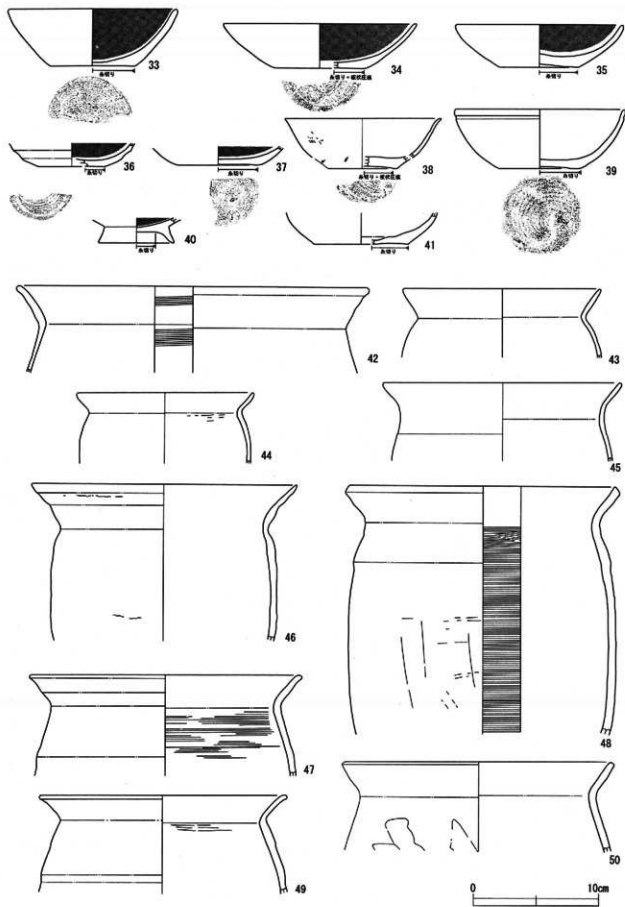


C区 第三面 柱穴

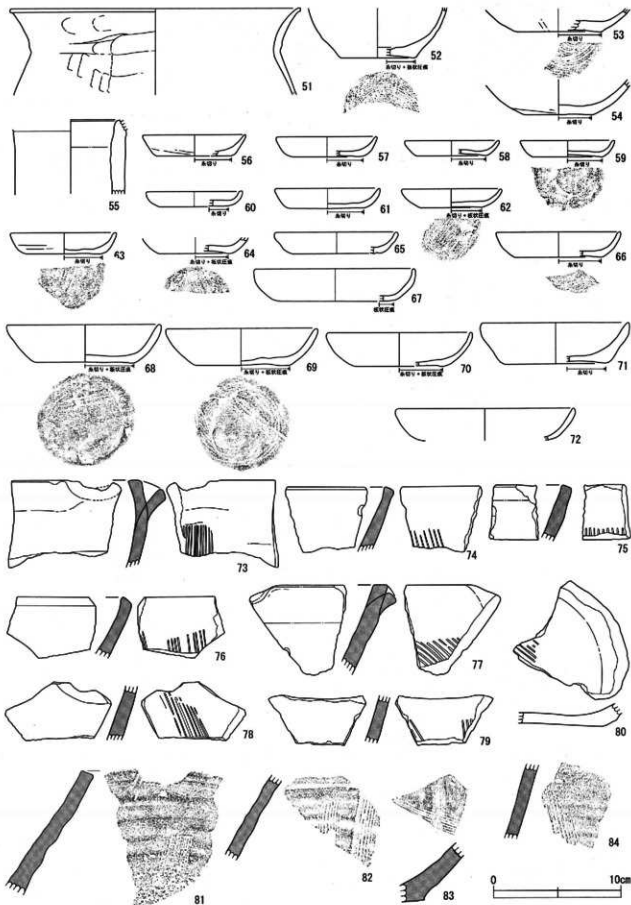
第62図 B区・C区第三面 土坑・柱穴群



第 63 図 出土遺物-I



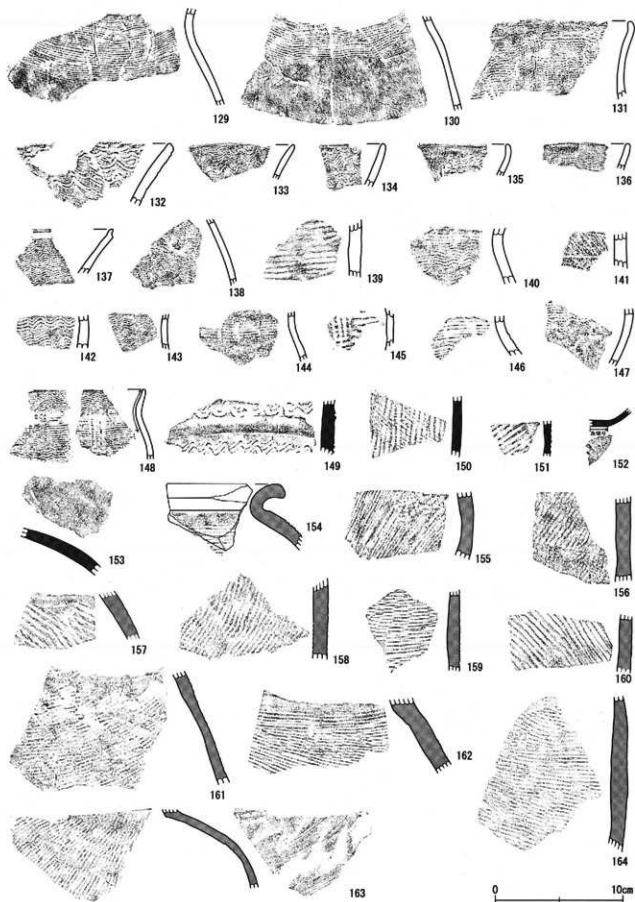
第64図 出土遺物-2



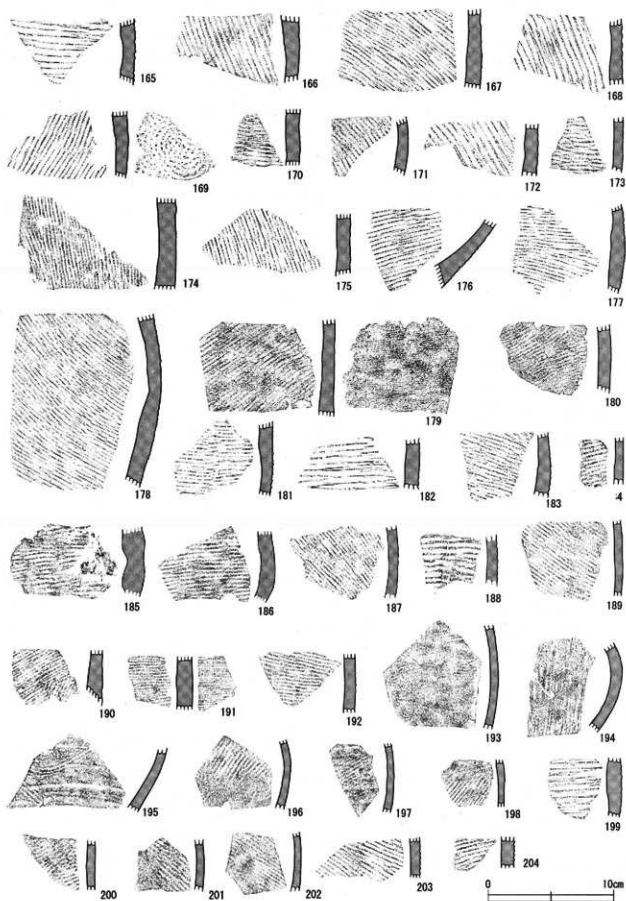
第 65 図 出土遺物-3



第 66 圖 出土遺物-4



第 67 图 出土遺物-5



第 68 圖 出土遺物-6

結 語

中野市の市道吉田西条線（通称平成通り）は中野扇状地の扇尖部と扇端部の境を横断する位置にあたる。その建設工事に先立ち、すでに西条地籍では「西条東屋敷添遺跡」、岩船地籍にまたがる「西条岩船遺跡群」の発掘調査が行われ、弥生時代から中世に及ぶ歴史が明らかになった。今回の「吉田宮脇遺跡」と「五里原遺跡」の調査はその延長に伴うもので、岩船地籍に隣接する吉田地籍に所在する。この両遺跡も西条・岩船地籍の遺跡と同じく、過去に発掘調査が行われた例がない。

『中野市遺跡詳細分布図』に記載された吉田宮脇遺跡の範囲は、金井汲次氏の報文『中野扇状地の考古資料』（高井16～19号）と、『中野市吉田出上の蔵骨器』（高井11号）に基づくものである。また、五里原遺跡は五輪塔群の分布地として記載されたものであり、壇原長則氏は『考古学から見た高社山周辺の歴史』（しなのき書房）で、中野市の中世墓と関連する遺跡として五里原遺跡をあげ、旧光岸寺境内に所在する小型の五輪塔群の写真を掲載している。必ずしも明確でなかった両遺跡の範囲は、今回の調査により八ヶ郷用水吉田堰を境に、北側を吉田宮脇遺跡、南側を五里原遺跡とすることになった。

ところで、今回の発掘調査で際立っていたのは遺跡をおおいつくす自然礫の堆積で、幾度かの激しい氾濫跡が見られた。ことに吉田宮脇遺跡は扇尖部に立地していることもあって、調査は難航した。五里原遺跡も同様に竪穴住居跡の遺構を埋めつくした状態が随所に見られた。扇状地の氾濫状態は西条岩船遺跡群でも見られたが、礫層と砂層の層序が区分され、これほどの激しい氾濫跡ではなかった。『長野県町村誌』等によると、永禄8年（1565）8月の夜間瀬川支流・横湯川の大洪水はことにひどく、吉田集落は瞬時に流失し、川原となったとある。地字に北川原、南川原、下川原の地名が残っているほどである。

発掘調査は平成21年度に吉田宮脇遺跡の第1次調査が、平成22年度に第2次調査が行われ、引き続き五里原遺跡の調査に着手した。緊急発掘調査でしばしば直面する問題は調査体制の組織である。臨時的な業務であり、人材が得られにくいためである。幸い第1次調査では（株）大成エンジニアリングから2名の調査員を派遣していただき、実施することができた。第2次調査は吉原佳市調査主任を中心に調査団が組織された。別に遺跡調査指導委員会も設けられ、調査推進の調整役をはたした。本調査にとって特記すべきことであろう。

発掘調査の成果については本報告書のとおりで贅言を要しない。ただ付言すれば、今回の調査により、中野扇状地の扇端部における遺跡の様相がようやく解明され始めたといえる。例えば、今回の調査では西条岩船遺跡群で確認されなかった縄文時代の遺物が発見された。また、五里原遺跡で顕著に見られた弥生時代後期から平安時代にかけての集落跡は、西条岩船遺跡群とほぼ同じであるが、五里原遺跡では住居跡や墓跡等の集落構成がより明確に把握されたといえよう。さらに中世では、吉田宮脇遺跡で遺構の検出面を確認することができたが、氾濫による攪乱が著しく、遺構と遺物の関係が把握できなかった。しかし、西条東屋敷添遺跡で中世の遺物がまとまって出土しており、西条岩船遺跡群でも中世の埋納銭が一括発見されているので、いずれ中世の集落跡も明らかになるであろう。

このように弥生時代以降、扇端部に集落が形成された背景には、稲作に適した低湿地と、湧水の飲料水が得られたことがあげられる。なお、近世の村落は古代の集落より低地に立地する傾向が見られる。多分、湧水帯の低下によるものであろう。

写真図版

図版 1



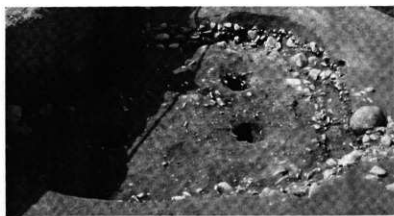
遺跡遠景



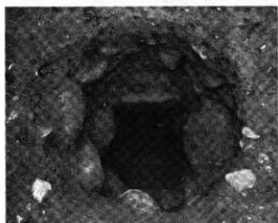
調査風景（五里原遺跡B区）



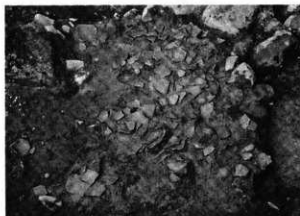
A区全景



第1号住居址



第1号住居址柱穴



第1号住居址土器出土状态

图版 3



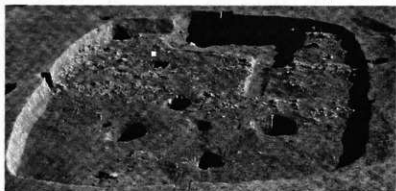
B区全景



第2号住居址



第8号住居址



第3号住居址

図版 4



C区全景 (南より)



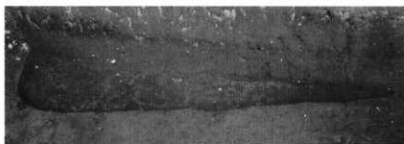
C区全景 (北より)



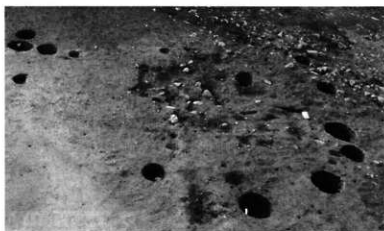
第1号住居址



第1号住居址完掘状态



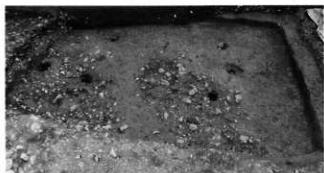
第9号住居址



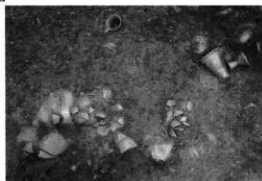
第10号住居址



第 5 号住居址



第 5 号住居址完掘状态



第 5 号住居址土器出土状态



第 6 号住居址



第 7 号住居址



第 7 号住居址内礫混入状态

図版 7



SK 1



SK 2



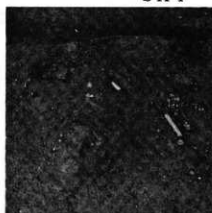
SK 3



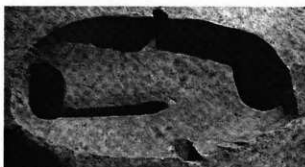
SK 4



SK 3 遺物出土状態

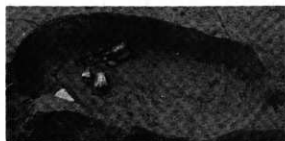


SK 5 遺物出土状態

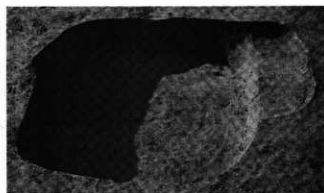


SK 5

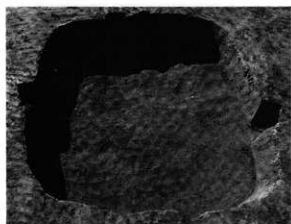
図版 8



SK 6



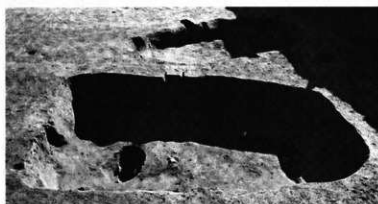
SK 7・SK 8



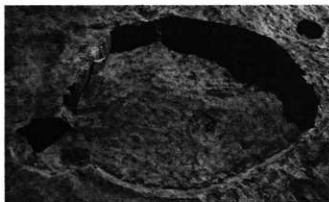
SK 9



SK 12土器出土状態



SK 10・SK 11



SK 12

図版 9



第 1 号住居址



第 1 号住居址カマド土器出土状態



第 2 号住居址



第 2 号住居址カマドと煙道



第 2 号住居址と柱穴群

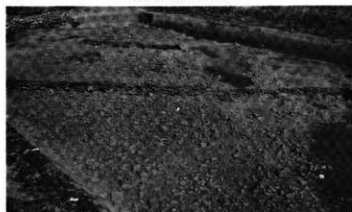
図版10



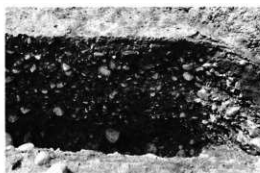
第3号住居址



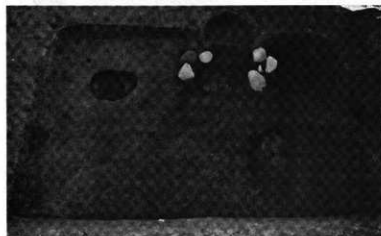
第3号住居址カマド



A区礫層



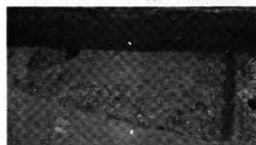
A区礫層断面



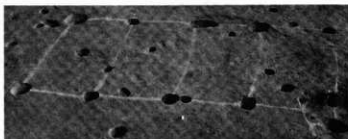
第4号住居址



第5号住居址



第6号住居址



掘立柱建物址



調査風景（吉田宮脇遺跡C区）



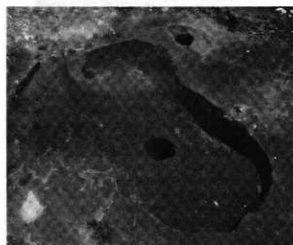
調査風景（五里原遺跡A区）



調査参加者（第2次吉田宮脇遺跡・五里原遺跡）



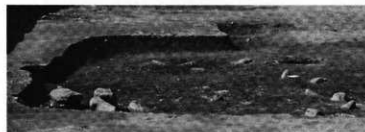
C区全景



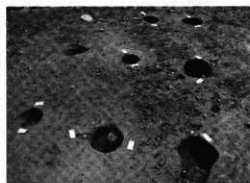
SK 2



SK 1



1号住居址・2号住居址



掘立柱建物址

吉田宮脇遺跡・五里原遺跡報告書抄録

ふりがな	よしだみやわきいせき・ごりはらいせき							
書名	吉田宮脇遺跡・五里原遺跡							
副書名	市道吉田西条線築造工事に伴う吉田宮脇遺跡・五里原遺跡発掘調査報告書							
編著者	関孝一・中島庄一・吉原佳市							
編集機関	中野市教育委員会							
所在地	〒383-2192 長野県中野市大字豊津 2508 番地 TEL 0269-38-3112							
発行年月日	2011年3月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° / ′	東経 ° / ′	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
よしだみやわき 吉田宮脇	長野県中野市 大字吉田字葉 師寺97番地1 他	中野市	76	36° 44′ 60″	138° 21′ 50″	平成21年4月1 日～平成22年 8月17日	2704	市道吉田 西条線築 造工事
ごりは 五里原	長野県中野市 大字吉田字五 里原1038番 地1他	中野市	75	36° 44′ 40″	138° 21′ 50″	平成22年8月 18日～平成22 年12月13日	1680	市道吉田 西条線築 造工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
吉田宮脇	散布地	弥生時代 平安時代	(平)住居址	(弥)後期土器、 (平)土師器、須恵器				
五里原	集落跡 集団墓	弥生時代 平安時代	(弥)住居址、 土坑墓 (平)住居址	(弥)後期土器、ガラ ス小玉、勾玉、管 玉、鉄釧 (平)土師器、須恵器				
要約	今回の調査では、数多くの遺構・遺物が発見された。遺構では、弥生時代後期の10棟の住居址、木棺墓5基を含む11基の土坑墓の発見が目される。多くの住居址と土坑墓の発見は、当地方の集落と集団墓の関係を考える上で貴重な資料となる。遺物では土坑墓から発見された鉄釧が特筆される。鉄釧は東日本で33遺跡49点（うち長野県16遺跡、29点）発見されているだけの貴重な遺物である。五里原遺跡は鉄釧が出土した飯山市須多ヶ峰遺跡と長野市浅川扇状地遺跡群のほぼ中間点にあたり、今回の発見で千曲川流域の鉄釧の渡来ルートを考える上で重要な資料となる。							

